長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

HIGASHIKABURA 4-SITE

東蕪４遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2002．3
長坂町教育委員会
峡北地域振興局農務部

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

HIGASHIKABURA 4-SITE

東蕪４遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００２．３
長坂町教育委員会
峡北地域振興局農務部

序

長坂町は広大な八ヶ岳南麓のほぼ中央に位置し、国蝶オオムラサキの生息地として全国的に知られているように、自然に恵まれた高原の町です。それとともに、およそ200ヶ所に上る遺跡の密集地帯としても知られています。

長坂町教育委員会では各種の開発事業に際し、このように数多い遺跡の保護をはかりつつ、必要に応じて発掘調査を実施し、記録として遺跡の内容を後世に伝えるための文化財保護事業を推進しております。

本書は平成12年度に中山間地域総合整備事業にともない発掘調査を実施した東蕪4遺跡の調査報告書です。東蕪4遺跡では縄文時代の住居跡、土坑、集石遺構などが発見されました。発掘調査事例の少ない中丸地内において縄文集落の一部が調査されたことは、この地域の歴史を解明する上で貴重な報告となりました。

最後に、東蕪4遺跡の調査にあたり、格別なご理解をいただいた中丸地区の皆様をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。本書が広く教育や研究の場で活用されることを期待しています。

2002年3月

長坂町教育委員会
教育長　瀬戸龍徳

例　言

1．本書は、2000（平成12）年度に実施した山梨県北巨摩郡長坂町中丸字東蕪地内に所在する東蕪4遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、中山間地域総合整備事業に伴う事前調査であり、山梨県峡北土地改良事務所（当時、現在は山梨県峡北地域振興局農務部）より委託を受けて長坂町教育委員会が実施したものである。

3．本書の執筆は、第4章を池谷勝典（株式会社アルカ）、その他を小宮山隆（長坂町教育委員会学芸員）が行い、編集は小宮山が行った。

4．発掘調査および整理作業において一部の調査・業務を以下の各機関に委託した。

基準点測量　㈱新生測量
空中写真測量　㈱シン技術コンサル
石器分析図化　㈱アルカ

5．遺構の写真撮影は小宮山が行い、遺物の撮影は村松佳幸（長坂町教育委員会学芸員）が行った。

6．本報告書に関わる出土品および記録図面・写真等は、長坂町教育委員会に保管している。

7．発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の方々に多大なご指導、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。
今福利恵（山梨県埋蔵文化財センター）、佐野隆（明野村埋蔵文化財センター）、閏間俊明（韮崎市教育委員会）

凡　例

1．掲載した遺構・遺物実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。

遺構　調査区全体図：1/100
住居跡：1/60
土坑：1/30

遺物　縄文土器：1/3または1/4
石鏃・石錐・掻器・使用痕剥片・二次加工剥片・両極石器・剥片・古銭：2/3
磨製石斧・打製石斧・敲石等・石皿・石棒：1/3

2．遺構図版中の遺物分布図のマークは各図版中に示してある。

3．遺構および遺物写真の縮尺は統一されていない。

4．遺構図中の断面図脇にある数値は標高を示す。

東蕪４遺跡目次

序
例言・凡例
本文目次
図版目次
表目次
写真図版目次
第１章　調査の経過と概要……１
　第１節　発掘調査に至る経過……１
　第２節　発掘調査の概要……１
　第３節　発掘調査組織……１
第２章　遺跡の立地と環境……１
　第１節　地理的環境……１
　第２節　歴史的環境……２
　第３節　基本層序……２
第３章　遺構と遺物……２
第４章　小形剥片石器……４
第５章　ま　と　め……６
参考文献……６

表　目　次

第１表　長坂町遺跡地名表……８
第２表　石器属性表……37
第３表　土器出土内訳……38
第４表　石器出土内訳……39

写真図版目次

図版１　調査区全景（南から）、Ⅰ区①作業風景
　Ⅰ区②作業風景
図版２　Ⅱ区全景（真上から）、Ⅱ区作業風景
　１号住遺物出土状況、１号住居跡
図版３　１号集石⑴、１号集石⑵、１号集石⑶
　１号集石⑷、１号土坑、４号土坑・ピット２～５
　７号土坑、８号土坑
図版４　１号住居出土土器①、１号住居出土土器②
　１号住居出土土器③、１号住居出土土器④
　１号住居出土土器⑤、１号集石出土土器
　８号土坑出土土器、Ⅰ区出土土器①
図版５　Ⅰ区出土土器②、Ⅱ区出土土器
　小形石器①、小形石器②
　剥片石器他、打製石斧
　磨石・敲石、石皿

図　版　目　次

第１図　長坂町遺跡分布図……７
第２図　東蕪４遺跡周辺の遺跡分布図……９
第３図　東蕪４遺跡周辺の地形・調査区配置図……10
第４図　調査区（Ⅰ区）全体図……11
第５図　調査区（Ⅱ区）全体図……12
第６図　調査区土層断面図……13
第７図　１号住居跡・８号土坑……14
第８図　１～７号土坑……15
第９図　出土土器①……16
第10図　出土土器②……17
第11図　出土土器③……18
第12図　出土土器④……19
第13図　出土土器⑤……20
第14図　出土土器⑥……21
第15図　出土石器①……22
第16図　出土石器②……23
第17図　出土石器③……24
第18図　出土石器④……25
第19図　１号住居跡遺物出土状況①……26
第20図　１号住居跡遺物出土状況②……27
第21図　１号住居跡遺物出土状況③……28
第22図　１号集石①……29
第23図　１号集石②……30
第24図　Ⅰ区遺物出土状況①……31
第25図　Ⅰ区遺物出土状況②……32
第26図　Ⅰ区遺物出土状況③……33
第27図　Ⅰ区遺物出土状況④……34
第28図　Ⅱ区遺物出土状況……35
第29図　掻器（第15図５）の使用痕……36

第１章　調査の経過と概要

第１節　発掘調査に至る経過

山梨県峡北土地改良事務所（当時：以下、土地改良事務所）は、八ヶ岳南麓における農村環境基盤整備を目的とした中山間地域総合整備事業（以下、中山間事業）を推進しており、1999（平成11）年、長坂町に対し事業案を提示した。事業案では複数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていることから、土地改良事務所と町産業課の事業サイドと県および町の教育委員会とで、これら埋蔵文化財の保護策について協議した。その結果、翌2000（平成12）年度に同町中丸字東蕪地内に予定された同事業の農業集落道整備で包蔵地の破壊が予測された東蕪４遺跡の発掘調査を町教委が同年度に実施することとなった。

2000（平成12）年４月に土地改良事務所から県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘の通知が提出されるとともに、土地改良事務所と長坂町との間に調査費に関する負担協定を締結し、同年９月に発掘調査を開始した。発掘調査は約４ヶ月を要し2001（平成13）年１月９日に県教育長あてに調査終了報告、長坂警察署長あてに埋蔵物発見届をそれぞれ提出した。整理作業は2001(平成13)年度実施し、年度末の2002（平成14）年３月をもって完了した。

第２節　発掘調査の概要

今回の調査においては、現集落道の拡幅工事が発掘調査の対象であるため、調査区は道路に沿った細長いものとなった。そのため農業集落道整備事業の工事面積は2,500㎡におよぶが、発掘調査対象面積は175㎡である。調査区に発掘調査・遺構測量の基準となる50㎝間隔のグリッドを想定した細部杭を設定した。調査は雑木の株・根を避けながら表土を小型重機で除去したのち、人力で包含層を精査した。出土遺物は原位置のまま平板実測で記録し、必要に応じて写真撮影を行った。遺構は簡易遣り方で手実測し、写真撮影を行った。全体図作成は㈱シン技術コンサルに委託し、空中撮影および図化を行った。

調査区は台地縁辺部（Ⅰ区）と台地南西側谷部（Ⅱ区）の２ヶ所からなるが、遺物が多く出土したのはⅠ区であった。遺構は全てⅠ区から発見され、縄文時代中期の竪穴住居跡１軒と集石遺構１基、土坑８基、ピット５基からなる。遺物は縄文時代早期末～前期初頭・中期・後期の土器、石器、中世の古銭などが出土している。

第３節　発掘調査組織

事業主体　長坂町教育委員会

事務局　教育長　小松清寿（～平成12年９月）
　　瀬戸龍徳（平成12年10月～）
　　教育課長　三井　茂
　　教育係長　小松武彦（～平成12年７月）
　　坂本美男（平成12年７月～）
　　社会教育係長　望月和夫（平成13年４月～）
調査担当　小宮山隆
調査補助員　吉田光雄
発掘作業員　井手恵利子　井手俊郎　井出仁美
　　有野（旧姓大木）明子　大柴富子
　　清水三恵　清井ゆき枝　清井義雄
　　名取初子　畑　梅子　渡辺早月
整理作業員　井出仁美　有野（旧姓大木）明子
　　清井ゆき枝　橋本はるみ　日向登茂子
　　石川昭江　小林広美

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

東蕪４遺跡の所在する北巨摩郡長坂町は、山梨県の北西部に位置し八ヶ岳南麓に立地する。南北約18㎞、東西約６㎞の南北に細長い町である。八ヶ岳の山体崩壊により起こった韮崎火砕流によって形成された台地上にある。標高は北端の八ヶ岳権現岳が最高点で2,786ｍを測り、南端はＪＲ日野春駅の南側で約490ｍである。標高1,200ｍ以上が急峻な山岳地帯だが、それ以下は比較的緩やかな地形となり、八ヶ岳南麓高原や長坂台地、八ヶ岳南麓低地等が広がる。長坂町南端より南では、火砕流台地を釜無川と塩川の浸食作用によって形成された通称「七里岩」と呼ばれる浸食崖が形成されている。

八ヶ岳南麓には、比較的多くの湧水があり、これを水源とする小河川は南流し、浸食作用によっていくつもの舌状台地を形成している。台地上は水利が悪いため、豊富な水量の湧水を引いて開発した灌漑用水や灌漑用溜池が数多く、県下でも有数の溜池の多い地域となっている。また、それを利用した水稲耕作が行われ、古くから八ヶ岳南麓地域でも有数の水田地帯となっている。

東蕪４遺跡の所在する長坂町中丸地区は、ＪＲ中央線の西側で小淵沢町や白州町に接する町の西部に位置し、標高はおおよそ750～800ｍである。中丸地区には東端に白井沢宮川、中央に大深沢川、やや西部に小深沢川の３本の河川が並行して南流している。それぞれの河川は台地を浸食し、大深沢川や小深沢川の下流部では比高50ｍほどの浸食崖が発達している。東蕪４遺跡は小深沢川の右岸（西岸）台地上に立地する。遺跡の北東から東側に

は小深沢川の段丘崖が迫り、遺跡付近と小深沢川床の比高は25～30mである。この台地の東側は現在の東蕪溜池付近の湧水を水源とする小深沢川支流により緩やかに浸食されている。遺跡付近の台地上（Ⅰ区）とこの支流との比高は８～10mである。

第２節　歴史的環境

八ヶ岳南麓は、県内でも有数の遺跡密度の濃い地域である。その中でも長坂町は遺跡が数多く分布し、これまでに208ヶ所の遺跡が確認されている。東蕪４遺跡が位置する中丸地区にも多くの遺跡が分布しているが、縄文時代あるいは平安時代の遺跡が特に目立つ。そのなかでも、東蕪４遺跡からみて小深沢川の対岸（左岸）の台地上に立地する新宿区健康村遺跡では、東京都新宿区立区民健康村建設にともない約８万㎡もの発掘調査が行われ、縄文時代前・中・晩期、平安時代、中世にわたる遺構と遺物が多数検出されている（新宿区民健康村遺跡調査団 1994『健康村遺跡』）。同じく大深沢川右岸には中世･戦国期の砦址と伝えられる天白砦址がある。やや東へ離れるが、大深沢川と白井沢宮川とにはさまれた台地上には、これまでの調査で縄文時代早～後期の遺構と遺物が検出された越中久保遺跡や高松遺跡がある（北巨摩市町村文化財担当者会 1999･2000『八ヶ岳考古』平成11･12年度年報）。

第３節　基本層序

今回の調査区は、台地中央部のⅠ区と台地縁辺斜面のⅡ区とに分かれ、それぞれの立地条件により、基本層序が異なっている。

Ⅰ区は台地中央部であるので、比較的堆積が少ない。表土下約30cmで褐色土になり、この層が地山となり、それを掘り下げて遺構が構築されている。浅い所では約10cm下げた所で褐色土になる。遺物は主に表土直下の黒褐色土（Ⅰ区２層）から出土している。

Ⅱ区は台地縁辺斜面であるため、深い所になると約90cm下に地山の褐色土が確認でき、Ⅰ区と比べると堆積は多い。その上層には人頭大の礫を多く含むⅡ区８層があるが、遺物はその層とその直上の暗褐色土（Ⅱ区７層）から出土しているので、台地上面から流されてきたものと考えられる。

第３章　遺構と遺物

１号住居跡

（位置）Ⅰ区②の中央やや南寄りに位置する。

（重複）８号土坑に切られる。

（形状）調査区の関係上、一部しか調査できなかったので形状は不明である。おそらく円形を呈すると思われるが、検出した住居跡の壁は割と直線状である。

（床面）硬化面は確認できなかった。

（施設）炉は検出できず、調査区外にあると思われる。ピットが５基あり、一部周溝が確認できた。ピットのほとんどが約50cmの深さをもち、一部は柱穴と考えてよいであろう。

（遺物）出土土器は第９～11図１～86である。各遺物の時期は、１～４は曽利Ⅱ式、５は曽利Ⅱ～Ⅲ式、６～８は曽利Ⅲ式、９～28は曽利Ⅳ式、29～36は曽利Ⅳ～Ⅴ式、37～58は曽利Ⅴ式、59～64は加曽利Ｅ系、65～69･78～86は中期後半、70～76は中期末、77は称名寺式である。以下、主な遺物の詳細を述べる。

11は体部が底部からほぼ直線状に広がる曽利Ⅳ式である。口縁部直下に１条の横位沈線を施し、その下に逆Ｕ字状と波状の沈線を４単位に縦位に施している。地文は櫛歯状工具で綾杉状に施文しているが、傾きはかなり緩やかである。施文順序は地文→沈線である。

12は曽利Ⅳ式であり、11と同じく体部が底部からほぼ直線状に広がる器形である。口縁部直下に１条の横位沈線を、その下に逆Ｕ字状の沈線を施している。逆Ｕ字状沈線の内側は櫛歯状工具による綾杉状の地文であるが、施文順序は地文→沈線である。９・13・19・21は同一個体と考えられる。

51は曽利Ⅴ式である。口縁部に２条の弧状沈線を施し、その間から下に逆Ｕ字状とその内側に１条の沈線を縦位に施文している。地文は櫛歯状工具によるハの字文である。口縁部の弧線と逆Ｕ字状沈線が出発する所がわずかに盛り上がり、かすかに波状口縁になっている。

63は、口縁部が内湾する加曽利Ｅ系である。地文に縄文を施した後、２条の逆Ｕ字状沈線を施している。２条の沈線の間は地文の縄文を磨り消している。逆Ｕ字状沈線は６単位で割り付けられていると思われる。

64は口縁部が内湾する加曽利Ｅ系である。口縁部にやや幅広い２条の横位沈線を施した後、沈線の上に、先端の丸い工具で刺突している。その下は縄文地文である。

70はミニチュア土器である。口縁部に片口のような窪みを付け、その両側を盛り上げている。窪みの下も底部にかけ盛り上がっており、その両側に沈線を施している。口縁部には細長い楕円形を横位に施している。

石器については第２・４表を参照されたい。

（遺物出土状況）第19～21図。石器は、一部が床面近くから出土しているが、ほとんど覆土中層から上層にかけ

て出土している。土器も曽利式、中でも曽利Ⅳ～Ⅴ式を中心に出土しているが、曽利Ⅱ～Ⅴ式まで覆土中層から上層にかけて出土しており、型式による層位的な出土は見られない。

出土状況を見ると、住居跡廃絶時に埋没したと考えられる遺物はほとんどなく、住居が埋没した後の窪地になったところに廃棄されたと考えられる。

11は住居跡南寄りから横倒しになり上から押しつぶされた状態で出土した(第７図)。破片の一部は８号土坑から出土し接合した。出土層位は覆土上層であり、住居跡にはともなわない。

(時期) 出土している遺物のほとんどが曽利Ⅳ～Ⅴ式ではあるが、覆土の中層から上層にかけて出土している状況なので、住居跡の使用時期は曽利Ⅳ～Ⅴ式以前である。中層には少量ながら曽利Ⅱ～Ⅲ式の破片も出土しているので、住居跡の使用時期は新しくても曽利Ⅰ式であると考えられる。今までの長坂町内の調査事例から経験的に判断すると、住居跡の掘り込みの深さやピットのあり方をみると、縄文中期中葉の住居跡に類似すると思われる。よって、床面直上の出土遺物がないのではっきりとは断定できないが、今のところこの１号住居跡の時期は中期中葉～曽利Ⅰ式としておきたい。

１号土坑

(位置) Ⅰ区①の北寄りで１号集石の北側に位置する。(重複) なし。(形状) 長軸110cm×短軸74cm×深さ57cmである。楕円形で、底部中央がさらに深くなっている。(遺物) なし。(時期) 不明。

２号土坑

(位置) Ⅰ区①の北寄りで１号集石の南側に位置する。(重複) ピット１と接する。(形状) 長軸124cm×短軸89cm×深さ38cmである。楕円形で、底部中央にピットがある。(遺物) なし。(時期) 不明。

３号土坑

(位置) Ⅰ区①の中央、２号土坑の南側に位置する。(重複) なし。(形状) 長軸72cm×短軸60cm×深さ23cmである。不整な楕円形を呈する。(遺物) なし。(時期) 不明。

４号土坑

(位置) Ⅰ区①の中央、３号土坑の南側に位置する。(重複) ピット３～５と重なる。(形状) 長軸70cm×短軸68cm×深さ23cmである。不整な円形をしている。(遺物) なし。(時期) 不明。

５号土坑

(位置) Ⅰ区①の南寄り、６号土坑の北西側に位置する。(重複) なし。(形状) 長軸69cm×検出短軸53cm×深さ38cmである。不整な楕円形をしている。底部中央にピットがある。(遺物) なし。(時期) 不明。

６号土坑

(位置) Ⅰ区①の南寄り、５号土坑の南東側にある。(重複) なし。(形状) 長軸94cm×短軸91cm×深さ27cmで、円形である。(遺物) なし。(時期) 不明。

７号土坑

(位置) Ⅰ区③北側に位置する。(重複) なし。(形状) 長軸90cm×短軸82cm×深さ36cmである。不整な楕円形をしている。(遺物) なし。(時期) 不明。

８号土坑

(位置) Ⅰ区②の中央やや南寄りに位置する。(重複) １号住居跡を切る。(形状) 検出長軸34cm×検出短軸49cm×深さ72cmである。一部調査区外に広がるため形状は不明であるが、おそらく楕円形であろう。(遺物) 第11図95～98。95は曽利Ⅲ式、96・97は曽利Ⅴ式、98は中期後半である。曽利後半の土器を中心に出土している。東隅から礫が数点出土し、その周辺から１号住11と接合する土器片が出土している。(時期) 出土した土器が小片で流れ込みの可能性もあるので断定はできないが、曽利Ⅳ～Ⅴ式期と考えられる。(備考) 最下層に草木類と思われる炭化物を多量に含む黒色土が堆積していた。底部には焼土が確認できなかったので、その場では燃やされなかったか、あるいは焼土が形成されないぐらいの小規模な燃やされ方であったかであろう。その直上層は壁面が崩れ堆積した層と考えられ、炭化物が堆積した後、一定期間野ざらしになっていた可能性がある。

ピット１

(位置) Ⅰ区①の北寄りで２号土坑の南側に位置する。(重複) ２号土坑と接する。(形状) 長軸51cm×短軸45cm×深さ42cmである。不整な円形をしている。(遺物) なし。(時期) 不明。

ピット２

(位置) Ⅰ区①の中央、４号土坑の東側に位置する。(重複) ピット３と接する。(形状) 長軸75cm×短軸48cm×深さ42cmである。不整な楕円形で、底部にピットが４基ある。(遺物) 縄文中期と思われる土器が出土している。(時期) 縄文中期の可能性がある。

ピット３

(位置) Ⅰ区①の中央、４号土坑の東側にある。(重複) ４号土坑・ピット４と重なり、ピット２と接する。(形状) 長軸35cm×短軸28cm×深さ15cmである。不整な円形をしている。(遺物) なし。(時期) 不明。

ピット4

（位置）Ⅰ区①の中央、4号土坑の南東側に位置する。（重複）4号土坑･ピット3と重なる。（形状）長軸52cm×短軸75cm×深さ25cmである。不整な円形をしている。（遺物）縄文中期後半の土器が出土している。（時期）縄文中期後半の可能性がある。

ピット5

（位置）Ⅰ区①の中央、4号土坑の西側にある。（重複）4号土坑と重なる。（形状）長軸45cm×短軸45cm×深さ24cmで、不整な円形である。（遺物）なし。（時期）不明。

1号集石

（位置）Ⅰ区①の北寄りに位置する。（重複）なし。（形状）遺構を検出した段階では、約10～20cm大の小礫が不整な楕円形のように置かれており、それらを取り除くと約30～40cm大の大礫が長方形に並べられていた。長方形の長軸は130cm、短軸は65cmである。（遺物）出土土器は第11図87～94である。87は曽利Ⅳ式、88～91は曽利Ⅴ式、92・93は加曽利Ｅ系、94は中期後半の土器である。1号集石から出土した土器は31点であり、主として曽利Ⅳ～Ⅴ式が多い。

石器については第2・4表を参照されたい。打製石斧･磨石類・石皿が礫と交ざって出土しているが、黒曜石は剥片も含めて出土していない。（遺物出土状況）土器は礫の間から出土している。第17図53の打製石斧は真ん中で接合しているが、その両方が1号集石に他の礫と一緒に置かれていた。（時期）出土遺物から曽利Ⅴ式期と考えられる。

Ⅰ・Ⅱ区出土土器

99～255まではⅠ区から出土し、99・100は五領ヶ台式、101は狢沢式、102･103は中期中葉～後葉の土器、104は東海系と思われる土器、105～110は曽利Ⅱ～Ⅲ式、111～114は曽利Ⅲ式、115～117は曽利Ⅲ～Ⅳ式、118～127は曽利Ⅳ式、128～134は曽利Ⅳ～Ⅴ式、135～186は曽利Ⅴ式、187～189は曽利式、190～203は加曽利Ｅ3～4式、204～210は加曽利Ｅ4式、211～219は中期後半の土器、220～229は中期末の土器、230～237・242～255は中期の土器、238は称名寺式、239～241は後期である。

256～270はⅡ区から出土し、256は早期末～前期初頭の繊維土器、257は曽利Ⅳ式、258・259は曽利Ⅴ式、260～263は加曽利Ｅ3～4式、264は加曽利Ｅ4式、265～268は中期後半、269は中期の土器の底部片である。270は北宋銭「嘉祐元寶」（初鋳年1056年）である。

第4章　小形剥片石器

はじめに

東蕪4遺跡の小形剥片石器について、整理・分析作業を行った。本遺跡から出土した小形剥片石器は242点である。その中から38点を資料体として選抜し実測図、属性表、図版を作成した。図版の組み方は、石器の時期がほぼ限定できる資料であることから器種ごとに組んで、石器組成が一覧できるようにした。

石器の説明は、概要で石器の数量と内訳、特徴などを記した。また必要に応じて項目をさいて属性の説明を行った。

石　材

小形剥片石器の石材は、1点の珪岩以外はすべて黒曜石である。これらの石材名称の区分は、岩石学的な区分であり、石器の材料の選択性と原産地に関係する属性として有効である。

剥離技術

押圧剥離の様相

本遺跡のなかで押圧剥離が認められた石器は、わずかに5点である。それらは、石鏃、石錐、掻器である。これらの石器は、押圧剥離の技術（加工技術）を記述することが最も効果的である。

ハンマーの種類はハードハンマーとソフトハンマーである。両者の違いは、石器よりも硬く変形しないのがハードハンマー、石器に当たって変形し、ショックを吸収するのがソフトハンマーである。

ハンマーの性質の違いは石器（主に石鏃のような小形剥片石器）の表面に以下のように現れる。

	打点	バルブ	稜線	剥離の伸び
ハード ハンマー	明瞭な コーン	発達	切り立つ	器体縁辺が多い
ソフト ハンマー	開いた コーン	未発達	平滑	器体中央を越える

以上の表で本遺跡の加工の剥離技術を検討した結果、以下のような加工技術が認められた。

ハードハンマーの押圧剥離（HP）の技術

コーンが明瞭でバルブが発達する深い剥離面。打点付近の稜線が立ち末端に階段状剥離もみられる。工具は、径が1㎜から1.5㎜程度のハードハンマー。剥離面幅が

3㎜程度、剥離面は5㎜程度に伸びる。急角度による周縁加工と平坦剥離による面加工がある。

ソフトハンマーの押圧剥離（SP）の技術

コーンが不明瞭でバルブはやや発達から未発達。工具の径は1㎜～1.5㎜程度なので剥離角の程度の差でバルブの発達は決まる。ハンマー自体がしなるようなソフトハンマーと推定できる。浅い剥離面であるが稜線は比較的明瞭である。剥離面の幅3㎜、長さ4㎜程度。

その他の剥離技術

押圧剥離技術の他に、ハードハンマーの直接打撃（HD）とハードハンマーの垂直打撃（HvD）がある。HDはコーンが大きく明瞭で、バルブが発達し、押圧剥離とは全く異なることがわかる剥離である。HvDはハンマーを石器に対して垂直方向から打撃し、圧縮の力で一気に剥離する技術である。剥離面の特徴は、バルブが発達せず、打点部分のくだけが目立ち、リングが波打つという点があげられる。

石器の概要（第15図）

上記の剥離技術の所見に基づき、器種ごとに石器の説明を行う。

《石鏃》 石鏃は、2点（1、2）出土している。剥離技術は、SPである。石材は、黒曜石と珪岩である。2点ともに凹基鏃である。

《石錐》 石錐は、2点（3、4）出土している。剥離技術は、HPである。石材は、黒曜石である。4は主要剥離面側をHPで平らに整形し、背面側を急角度の剥離で整形する。断面形は、三角形になる。3は、HDで剥離された縦長剥片の末端辺の角をHPで刃部に整形している。刃部には使用による微細剥離が認められる。

《掻器》 掻器は、1点（5）のみの出土である。剥離技術は、HPである。石材は、黒曜石である。素材は、HDで剥離された小形の貝殻状剥片である。背面側の周縁部は、細かな剥離で覆われており、剥離面の様相はSPであるがそれらの剥離面は幅がまちまちで一定性がないこと、打点付近に微細剥離が顕著であることから使用痕剥離であると考えられる（第29図）。加工と考えられる剥離面が見られる部分は、右側辺の上部である。

《二次加工剥片》 この器種は、成形加工に折取りが認められる石器であり、2点（6、7）出土している。6は、HvDで剥離された剥片を背面側から打撃を加え半裁している。何らかの石器の未成品と考えられる。7は、HDで剥離された剥片の末端部を主要剥離面側から打撃を加えて比較的平坦な折れ面を形成している。その折れ面には、微細な剥離がわずかに認められる。

《両極石器》 この器種は、両極打撃によって定義される石器である。本遺跡では、HDで剥離された剥片に両極打撃を行っている石器（8、9、10、11）と初めから両極打撃を行っている石器（12）がある。前者を両極石器1とし、後者を両極石器2とする。両極石器1は、剥片を素材として素材の厚みを取るために両極打撃の技術を用いている。このような小形で薄い剥片を成形することから、石鏃の未成品であると考えられる。両極石器2は、石器そのものが両極打撃で作出されている。両極石器1と2では、両極打撃の技術を用いる意味が全く違うことに注意が必要である。

《使用痕剥片》 本遺跡を特徴づける石器である。23点（13～25）出土している。素材は、HvDで剥離された剥片とHDで剥離された剥片である。石器の特徴は、二次加工は行わず剥片の鋭い辺を刃部として使用している石器である。刃部には、使用による微細剥離が認められる。用いられる剥片の特徴は、長さ・幅が3㎝未満で厚みが5～8㎜程度のものが主体をしめ、背面側に原礫面を残しているものが多いということである。これは、剥がされた石核の大きさに起因するものである。

《石核》 石核は、1号住居跡から出土した1点（41）のみである。小形の原石の平坦面を打面としてHDで貝殻状の剥片が剥離されている。

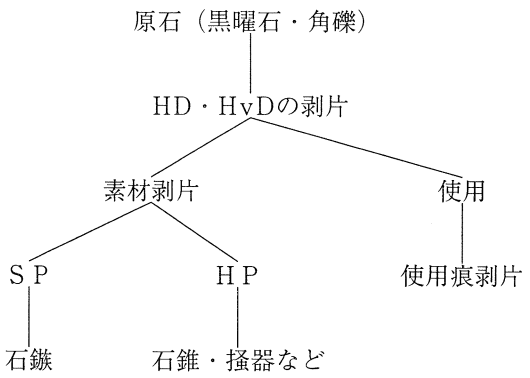
《原石》 原石は、1号住居跡から出土した2点（39、40）のみである。特徴は、角礫であることと大きさが似ていることである。大きさは、長さ・幅が5㎝未満で厚みが3㎝未満の範囲におさまる程度である。上記で述べてきた剥片石器の素材の特徴をみても、この程度の大きさの原石が遺跡に持ち込まれて消費されていたと考えられる。

まとめ

本遺跡の小形剥片石器の特徴は、黒曜石の小形の角礫を用いHDあるいはHvDで剥離し、剥がされた剥片は鋭い縁辺を刃部として使用する使用痕剥片が多く、一部が石鏃や石錐の素材として用いられるということである。石鏃やドリルなどの定形石器には、押圧剥離が用いられ、石鏃はSP、ドリルはHPを用いるという特徴がある。本遺跡の小形剥片石器の製作構造は、次頁の図にまとめることができる。

今後の課題としては、本遺跡を特徴づける黒曜石の使用痕剥片がどのような対象物にどのような使われ方をしていたのか明らかにしていく必要があると考えられる。

さらに、これまで見逃されてきたであろうこれらの使



用痕剥片について、周辺地域、同時期の遺跡の石器組成を再検討していかなければいけない。

参考文献

角張淳一　2000「続・石器研究についての感想」『東京考古』18　東京考古談話会
竹岡俊樹　1989『石器研究法』言叢社

第5章　ま　と　め

今回の調査は175㎡と調査面積は少ないものの、縄文時代中期の住居跡1軒・中期後半の集石1基、土坑8基、ピット5基が発見された。発掘調査の少ない中丸地区での貴重な調査事例となった。

ここでは、調査区全体の出土状況を検討し、まとめとしたい。

Ⅰ区の遺物出土状況　Ⅰ区は①～③の3地区に分けられるが、①が台地平坦面の縁辺部にあたり、②・③にかけて南斜面を下っていく。標高の高いⅠ区①・②にかけて遺物が集中し、Ⅰ区③の南端部からはほとんど出土していない。縄文時代の集落は台地平坦面にあることが多く、①・②に遺物が多く出土することは当然といえる。③は集落のはずれにあたるため遺物が少なく、それらも平坦面から流れてきたものと思われる。③の北側に7号土坑があるが、もしかするとそれが集落の南端とも考えられるほど、③の南端には遺構も遺物も少ない。

Ⅰ区の出土土器は中期後半が多いが、中でも曽利Ⅳ～Ⅴ式が多く、1号住の出土土器と同じような傾向を示している。1号住の上層はⅠ区包含層へと続くため同じ内容になるが、中層も同じような内容である。おそらく曽利Ⅳ～Ⅴ式期では、1号住が埋まり窪地と化していて、そこやその周辺に土器を廃棄したのであろう。

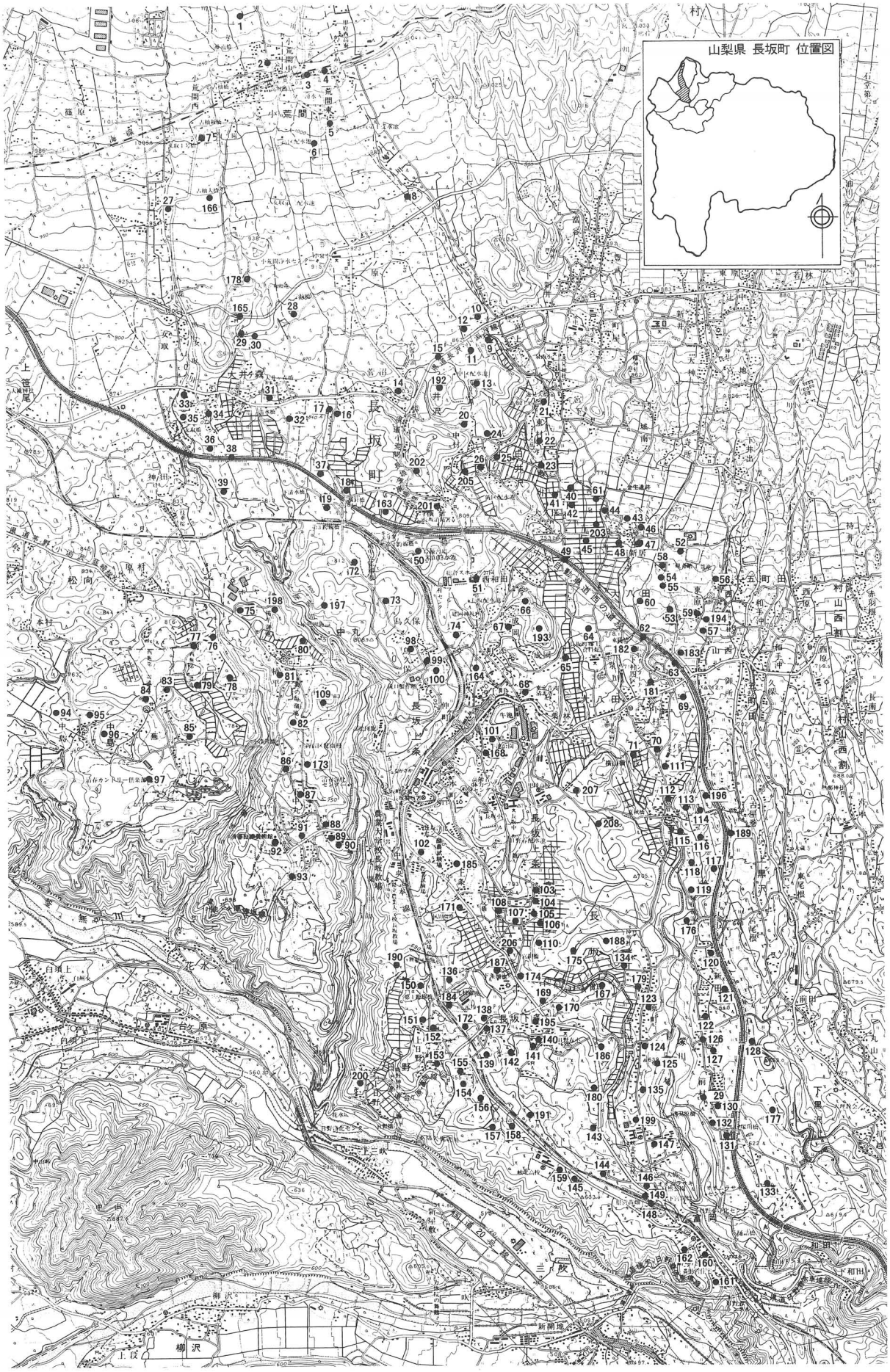
数多く出土している曽利式でも、細かく見ると微妙に出土状況が異なっている。曽利Ⅱ～Ⅲ式では、①・②から出土し、特に②の1号住の北側に多く出土している。曽利Ⅳ式でも同じような傾向であるが、③にまで分布を伸ばしている。曽利Ⅴ式となると③により広範囲に分布している。加曽利E系や中期末の土器は③にわずかに広がるだけで、時期ごとに見ると曽利Ⅳ～Ⅴ式が最も広く広がっている。この時期に調査区周辺で生活をしていたのであろう。1号住は曽利Ⅰ式以前のものであるので、曽利Ⅳ～Ⅴ式の住居跡は確認されなかったが、調査区外に展開していることは間違いない。

Ⅱ区の遺物出土状況　Ⅱ区は台地南西側にある谷部であり、曽利Ⅴ式を中心に出土しているが、おそらく地形的に見て台地平坦面からの流れ込みであろう。黒曜石片は比較的まとまって出土しているが、土器は散漫な状況を示している。

また、1点だけではあるが、前期初頭の繊維土器が出土している。他の土器と同様に流れ込みと考えられるが、台地平坦面にその時期の生活痕跡が残っていることを示す遺物である。八ヶ岳南麓において該期の土器の出土が少ないだけに貴重な発見となった。

参考文献

新宿区区民健康村遺跡調査団　1994『健康村遺跡』
小宮山隆・山下大輔　1999「高松遺跡」『八ヶ岳考古』平成10年度年報　北巨摩市町村文化財担当者会
小宮山隆　2000「越中久保遺跡」『八ヶ岳考古』平成11年度年報　北巨摩市町村文化財担当者会
知多古文化研究会編　1997『愛知県南知多町の考古資料』



第１図　長坂町遺跡分布図

第１表　長坂町遺跡地名表

（旧石＝旧石器時代　縄＝縄文時代　弥＝弥生時代　古＝古墳時代　奈＝奈良時代　平＝平安時代　中＝中世　戦国＝戦国時代　江戸＝江戸時代）

001　耳塚
002　法性寺前遺跡　縄 中
003　信玄原遺跡　縄
004　小荒間古戦場跡　戦国
005　桜畑遺跡　平 江戸
006　小泉遺跡　江戸
007　菅間遺跡　縄
008　桜畑南遺跡　縄
009　糀屋敷東遺跡　縄
010　糀屋敷北遺跡　縄
011　糀屋敷遺跡　縄
012　牛久保遺跡　縄 弥
013　牛久保南遺跡　縄
014　沢入遺跡 菅沼氏館址　縄
015　苧干平遺跡　縄
016　東下屋敷遺跡　縄
017　西下屋敷遺跡　縄 中
018　新田森遺跡　縄
019　西下屋敷南遺跡　縄
020　横手遺跡　縄 中
021　神之原遺跡　縄
022　屋敷附遺跡　縄 中
023　内城遺跡　縄
024　十郎林遺跡　縄 中
025　阿原遺跡　平
026　中尾根遺跡　縄
027　手白尾遺跡　縄
028　夫婦岩遺跡　縄
029　横山１遺跡　縄
030　横山２遺跡　縄
031　横山平南遺跡　縄
032　葛原北遺跡　縄
033　上フノリ平北遺跡　縄
034　上フノリ平遺跡　縄
035　上フノリ平西遺跡　縄
036　下フノリ平北遺跡　縄
037　葛原遺跡　縄 弥
038　下フノリ平遺跡　縄
039　下フノリ平南遺跡　平
040　別当遺跡　縄
041　別当西遺跡　縄
042　別当十三塚　中
043　南新居北遺跡　縄 平 中
044　深草館址　戦国
045　小和田遺跡　縄 平 中
046　南新居屋敷址　平 中
047　南新居遺跡　平
048　南新居西遺跡　平
049　小和田館址　平 戦国 江戸
050　米山遺跡　縄 弥
051　米山東遺跡　縄
052　塚田遺跡　古 平
053　窪田遺跡　縄 古 平
054　弥右衛門塚１　古？
055　弥右衛門塚２　古？
056　渋田北遺跡　平
057　渋田遺跡　弥 平 中
058　東原の土塁　中
059　東原遺跡　中
060　柳新居遺跡　縄 古 平
061　原田遺跡　縄 平
062　柳坪Ａ遺跡　縄 弥 古 平
063　柳坪Ｂ遺跡　縄 弥 古 平
064　小屋敷遺跡　縄 平 中
065　久保地遺跡　縄
066　成岡遺跡　縄 弥 平 中
067　成岡新田遺跡　弥 平 中
068　曲田遺跡　縄 平
069　石原田北遺跡　縄 平 中
070　石原田南遺跡　縄 平
071　塚原遺跡　縄
072　越中久保遺跡　縄 平 中 江戸
073　久保遺跡　縄
074　房屋敷遺跡　縄 江戸
075　池ノ平遺跡　縄
076　東蕪３遺跡　平
077　東蕪２遺跡　縄 平
★078　東蕪４遺跡　縄 平
079　東蕪１遺跡　縄 平
080　和手山東遺跡　中
081　小尾平遺跡　旧石 縄 中
082　間の原遺跡　縄
083　西蕪東遺跡　平
084　西蕪遺跡　縄
085　西蕪南遺跡　縄 平
086　和手遺跡　縄 平
087　腰巻遺跡　縄
088　城山上北遺跡　縄 平 中 江戸
089　城山上遺跡　縄 中
090　中丸砦址　戦国
091　居久保遺跡　縄 平
092　清春白樺美術館南遺跡　縄
093　細久保遺跡　縄
094　後平遺跡　縄 平
095　狐平北遺跡　縄 平
096　狐平遺跡　縄 平
097　大平遺跡　縄 平
098　下鳥久保遺跡　縄
099　鳥久保遺跡　縄 江戸
100　高松遺跡　縄
101　上町遺跡　縄 奈
102　酒呑場遺跡　縄 古 平 江戸
103　東村Ａ遺跡　縄 奈 平 中 江戸
104　東村Ｂ遺跡　古 平 中 江戸
105　中村遺跡　古 平 中 江戸
106　錨田遺跡　平
107　西村遺跡　古 平 中 江戸
108　中反遺跡　縄 平
109　柿平・藤塚
110　長坂氏屋敷址　古 平 中
111　白山神社前遺跡　縄 平
112　上ノ屋敷遺跡　縄 平 中 江戸
113　大々神十三塚　中
114　大々神Ａ遺跡　平
115　大々神Ｂ遺跡　古 平
116　治郎田遺跡　古 平
117　頭無Ａ遺跡　平
118　樫木遺跡　弥 古
119　塚川・柳坪遺跡　縄 江戸
120　頭無遺跡　縄
121　新田遺跡　縄
122　塚之越遺跡　縄 平
123　原町北遺跡　古 平
124　原町遺跡　江戸
125　上久通北遺跡　縄 平
126　塚川の土塁　中 戦国
127　下村遺跡　縄 平 中
128　塚川十三塚群　中
129　宮久保遺跡　縄
130　下村南遺跡　縄
131　泥里西遺跡　縄 平
132　勝見遺跡　縄 平
133　競馬場遺跡　縄 平
134　寺前遺跡　縄 平 中
135　上久通遺跡　縄
136　反田遺跡　縄 平 中
137　三井氏屋敷址　中 江戸
138　北村遺跡　縄 古 平
139　新居遺跡　縄 平 中
140　相吉氏屋敷址　中
141　相吉遺跡　奈 平
142　植松氏屋敷址　中
143　下屋敷遺跡　縄
144　清水頭遺跡　縄 古 奈 平
145　向原遺跡　平
146　三ツ墓古墳２　古
147　農業高校前遺跡　縄
148　三ツ墓古墳３　古
149　三ツ墓古墳１　古
150　池ノ平昭和堤北遺跡　縄
151　池ノ平Ａ遺跡　縄 奈 平
152　向井丹下屋敷址　中
153　池ノ平Ｂ遺跡　縄
154　上日野遺跡　縄 江戸
155　田中氏屋敷址　中
156　上日野Ａ遺跡　縄 平
157　上日野Ｂ遺跡　縄 平
158　上日野Ｃ遺跡　縄 平
159　姥久保遺跡　古 江戸
160　日野原遺跡　中 江戸
161　上日野原遺跡　縄 平 中 江戸
162　富岡遺跡　江戸
163　横針・中山遺跡　中
164　大林遺跡　縄 平 江戸
165　中込遺跡　縄
166　手白尾東遺跡　縄
167　西屋敷遺跡　古
168　上町南遺跡　縄
169　龍角西遺跡　縄 弥 古 平 中 近代
170　龍角遺跡　縄 古 平 中
171　長坂上条遺跡　縄 弥 平
172　西久保遺跡　縄
173　新宿区健康村遺跡　縄 平 中 江戸
174　長坂下条・藤塚
175　和田遺跡　弥 古
176　古屋敷遺跡　縄
177　泥里遺跡　縄
178　中込北遺跡　縄
179　渋沢・上町遺跡　縄
180　下屋敷北遺跡　縄 平
181　柳坪南遺跡　平
182　柳坪北遺跡　縄 弥 平 中
183　境原遺跡　縄 弥 平
184　北村北遺跡　縄 平
185　酒呑場東遺跡　縄 弥 平
186　山本遺跡　縄
187　北村東遺跡　縄 古
188　大久保遺跡　縄 中
189　天王塚古墳　古
190　池之平北遺跡　縄 平
191　清水頭北遺跡　縄 平
192　苧干平の土塁
193　成岡・藤塚
194　馬越場塚　中
195　紺屋遺跡　縄 平 中
196　治郎田北遺跡　平
197　竹原遺跡　縄 中 江戸
198　天白砦址　中 戦国
199　下原遺跡　縄
200　下日野遺跡　縄
201　横針・前久保遺跡　旧石 縄
202　横針・宮久保遺跡　縄 平
203　深草遺跡　平
204　上の棒道　戦国 江戸
205　中田遺跡　縄
206　長坂上条・藤塚遺跡　古 平
207　池之窪遺跡　縄 平
208　段道遺跡　縄

075　池ノ平遺跡　縄

076　東蕪３遺跡　平

077　東蕪２遺跡　縄 平

●078　**東蕪４遺跡　縄 平**

079　東蕪１遺跡　縄 平

080　和手山東遺跡　中

081　小尾平遺跡　旧石 縄 中

082　間の原遺跡　縄

083　西蕪東遺跡　平

084　西蕪遺跡　縄

085　西蕪南遺跡　縄 平

086　和手遺跡　縄 平

087　腰巻遺跡　縄

097　大平遺跡　縄 平

109　柿平・藤塚

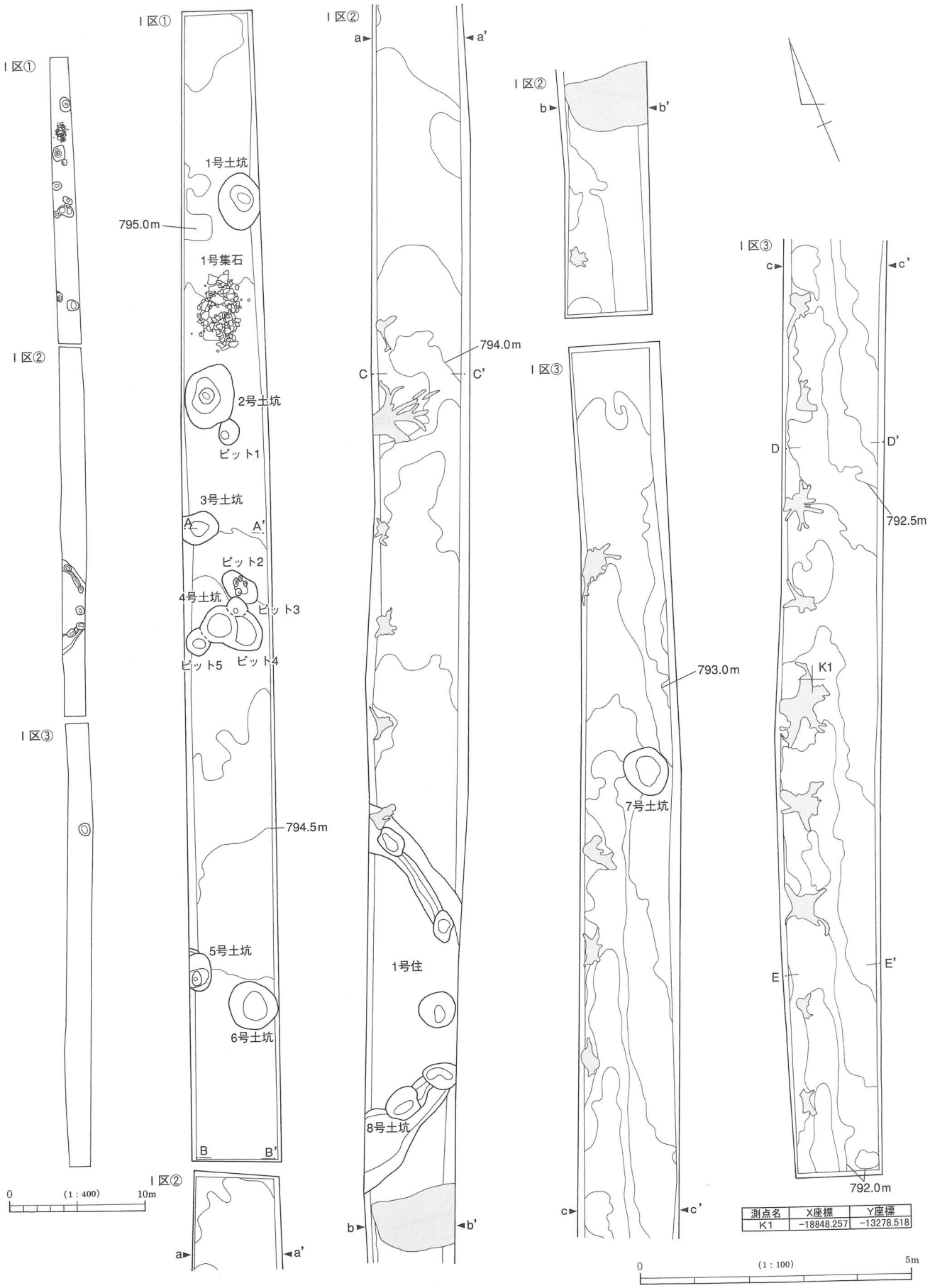
173　新宿区健康村遺跡　縄 平 中 江戸

197　竹原遺跡　縄 中 江戸

198　天白砦址　中 戦国

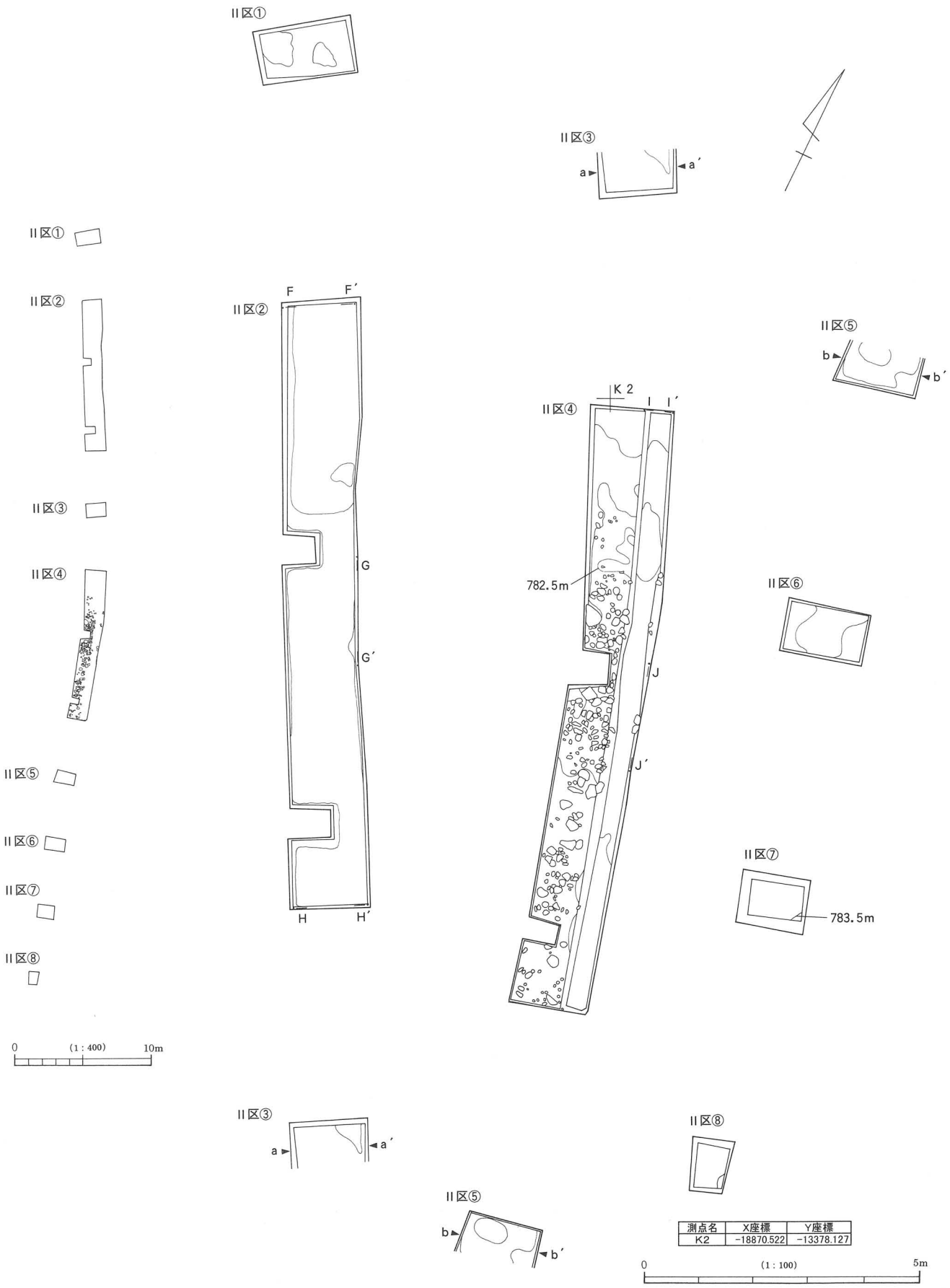
第２図　東蕪４遺跡周辺の遺跡分布図（1/10,000）

第３図　東蕪４遺跡周辺の地形・調査区配置図（1/2,000）

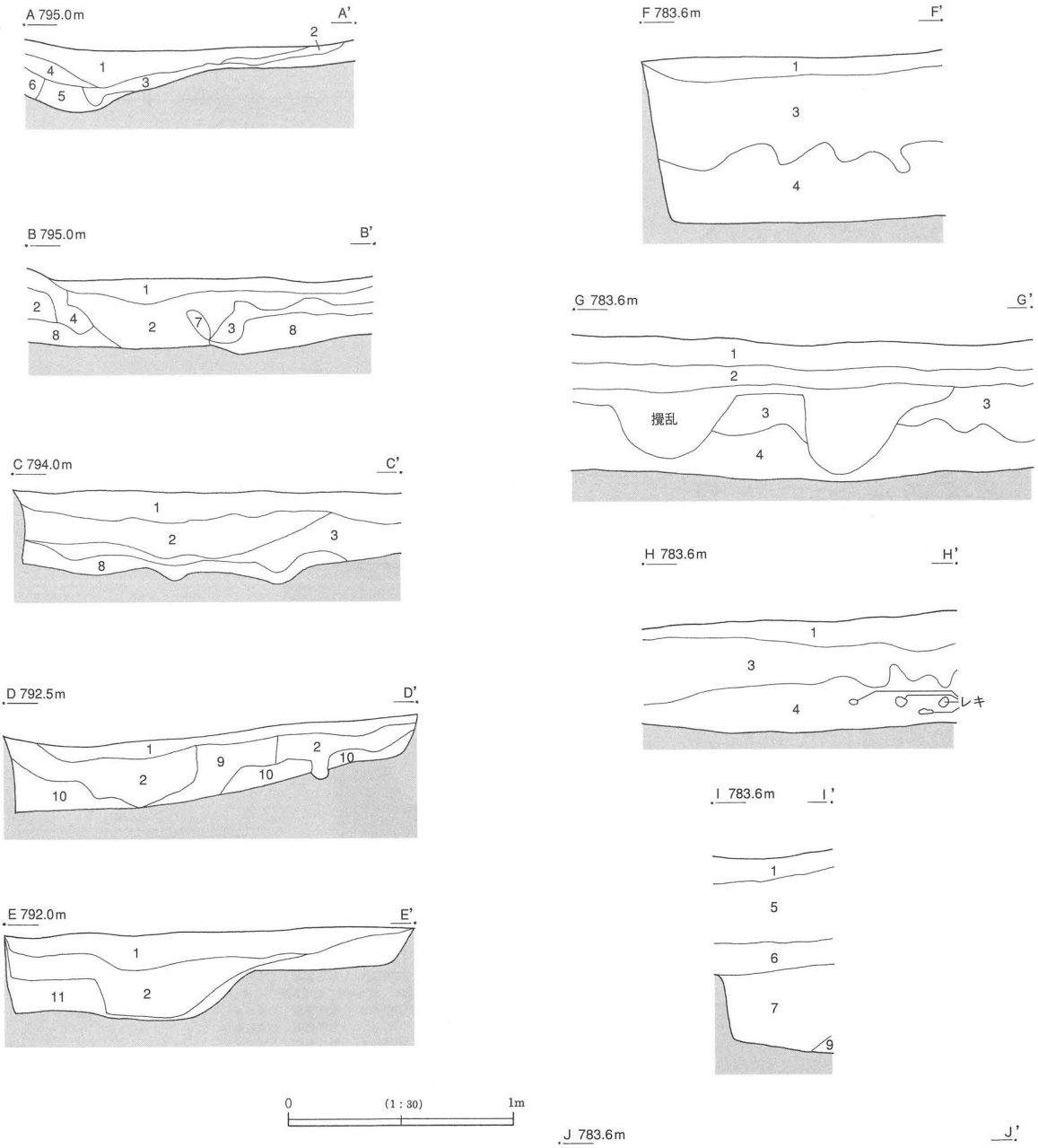


測点名	X座標	Y座標
K1	−18848.257	−13278.518

第4図　調査区（Ⅰ区）全体図



第５図　調査区（Ⅱ区）全体図



I区土層説明

SP. A

1. 黒褐色	5YR 2/1	粒子不緊密	しまりなし 表土
2. 黒褐色	5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし
3. 黒褐色	7.5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし ロームブロック少量含む
4. 黒褐色	7.5YR 3/2	粒子緊密	しまりあり
5. 黒褐色	5YR 3/1	粒子緊密	しまりなし ローム粒子を多く含む（3号土坑埋設土）
6. 赤黒色	2.5YR 2/1	樹根あとと思われる	

SP. B

1. 黒褐色	5YR 2/1	粒子不緊密	しまりなし 表土
2. 黒褐色	5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし
3. 黒褐色	7.5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし ロームブロック少量含む
4. 黒褐色	7.5YR 3/2	粒子緊密	しまりあり
7. 褐色	7.5YR 4/4	ロームブロック	
8. 褐色	7.5YR 4/3	粒子緊密	しまりあり ローム粒子を多く含む

SP. C

1. 黒褐色	5YR 2/1	粒子不緊密	しまりなし 表土
2. 黒褐色	5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし
3. 黒褐色	7.5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし ロームブロック少量含む
8. 褐色	7.5YR 4/3	粒子緊密	しまりあり ローム粒子を多く含む

SP. D

1. 黒褐色	5YR 2/1	粒子不緊密	しまりなし 表土
2. 黒褐色	5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし
9. 暗赤褐色	5YR 3/2	粒子不緊密	しまりなし
10. 黒褐色	7.5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし ロームブロックを多く含む

SP. E

1. 黒褐色	5YR 2/1	粒子不緊密	しまりなし 表土
2. 黒褐色	5YR 2/2	粒子緊密	しまりなし
11. 黒褐色	7.5YR 2/2	粒子緊密	しまりあり ロームブロックを多く含む

II区土層説明

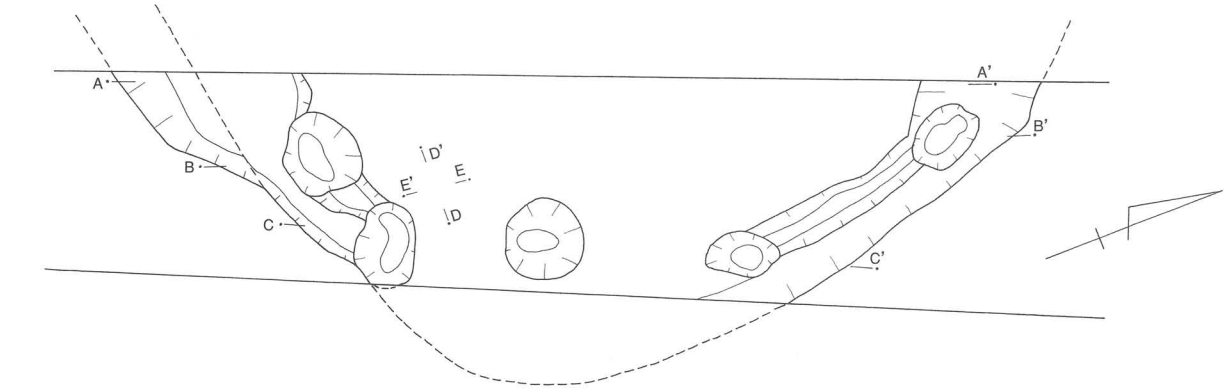
SP. F G H

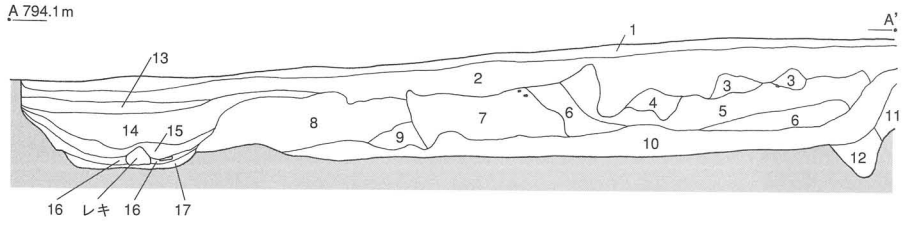
1. 黒褐色	7.5YR 3/1	粒子不緊密	しまりなし 表土 現耕作土
2. にぶい褐色	7.5YR 5/4	粒子不緊密	しまりあり 畑又は畔の造成地か？
3. 黒褐色	10YR 3/2	粒子不緊密	しまりなし 炭とローム粒子を5%含む
4. 暗褐色	10YR 3/4	粒子緊密	しまりなし 拳大の礫あり 包含層

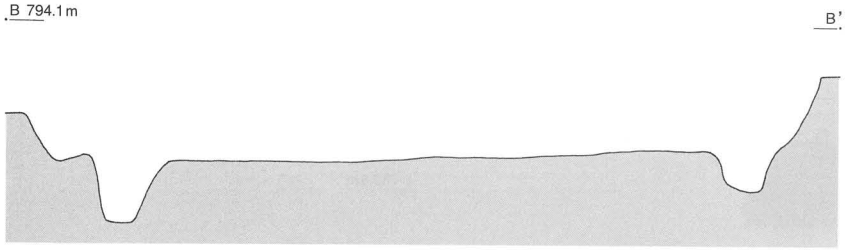
SP. I J

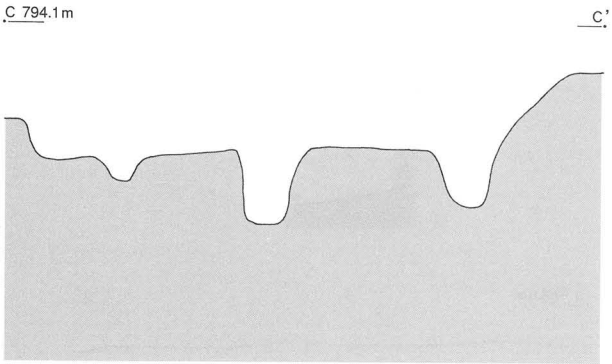
1. 黒褐色	7.5YR 3/1	粒子不緊密	しまりなし 表土 現耕作土
5. 黒褐色	10YR 3/2	粒子不緊密	しまりなし 耕作土
6. にぶい褐色	7.5YR 5/4	粒子緊密	しまりなし ロームを4%含む
7. 暗褐色	10YR 3/3	粒子緊密	しまりなし
8. 黒褐色	7.5YR 3/1	粒子緊密	しまりなし 人頭大の礫を50%含む
9. にぶい橙	7.5YR 6/4	粒子緊密	しまりなし

第6図　調査区土層断面図







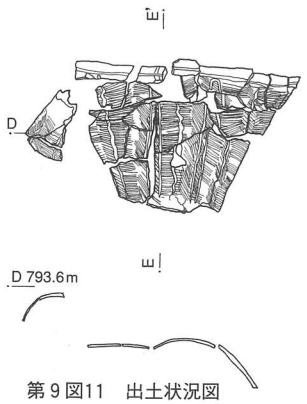


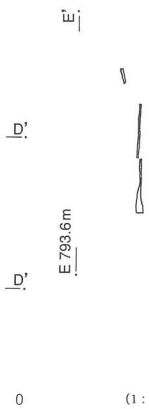
0 (1 : 60) 2m

1号住・8号土坑

1．路盤　小石とセメントの砂
2．黒色　10YR2/1　粒子緊密　しまりあり　炭化物とロームを2%含む
3．褐色　7.5YR4/3　粒子緊密　しまりなし
4．黒色　10YR2/1　粒子緊密　しまりなし　樹根による撹乱
5．にぶい黄褐色　10YR4/3　粒子緊密　しまりなし
6．灰黄褐色　10YR4/2　粒子緊密　しまりなし　ロームブロックを1%含む
7．暗褐色　10YR3/3　粒子緊密　しまりあり
8．褐色　10YR4/4　粒子緊密　しまりあり
9．褐色　10YR4/4　粒子緊密　しまりなし
10．黒褐色　10YR3/2　粒子緊密　しまりなし
11．褐色　7.5YR4/4　粒子不緊密　しまりなし　樹根による撹乱
12．灰褐色　7.5YR4/2　粒子緊密　しまりなし　周溝の覆土
13．黒褐色　5YR2/1　粒子緊密　しまりあり　カーボンとローム粒子を3%含む
14．黒褐色　5YR2/1　粒子緊密　しまりあり　カーボンとロームブロックを10%含む
15．黒褐色　5YR2/2　粒子緊密　しまりあり　カーボンとロームブロックを3%含む
16．灰褐色　7.5YR4/3　粒子不緊密　しまりなし　壁からの流れ込み
17．黒色　10YR2/1　炭化物層　しまりなし　草本類の炭と思われる

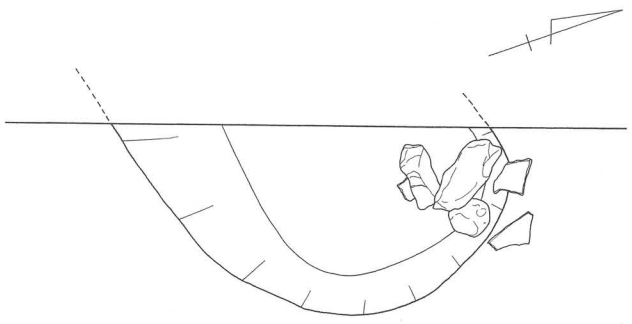
1号住居





第9図11　出土状況図

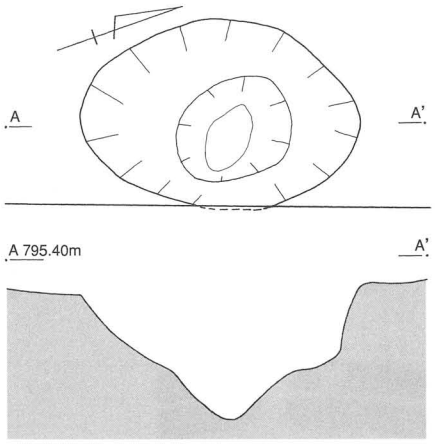
0 (1 : 15) 50cm



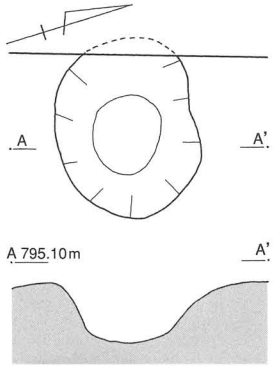
8号土坑

0 (1 : 30) 1m

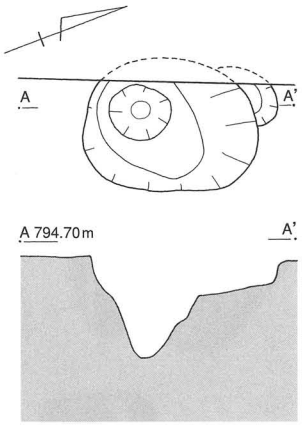
第7図　1号住居跡・8号土坑



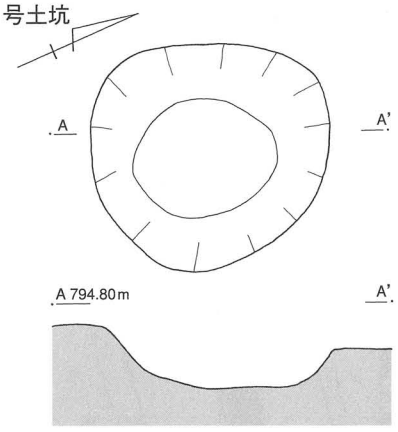
1 号土坑



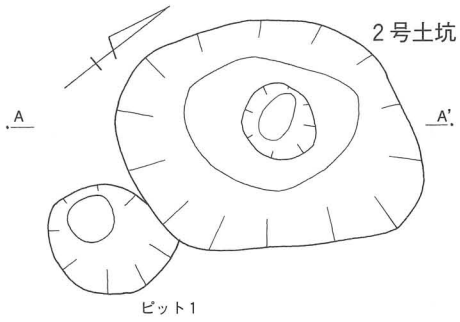
3 号土坑

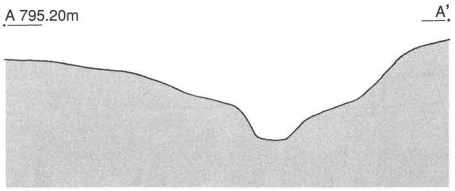


5 号土坑

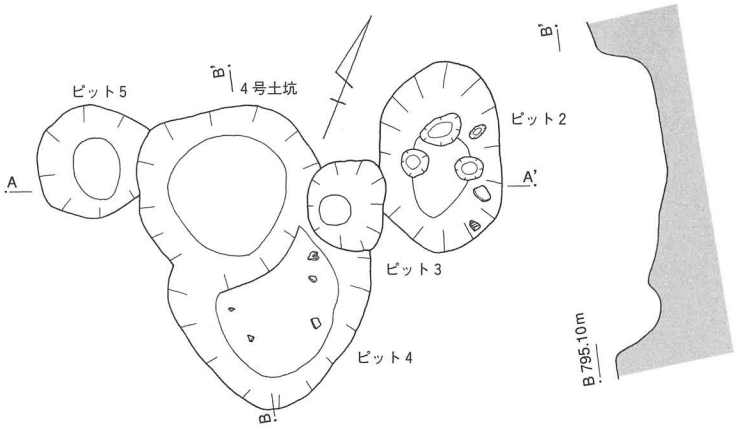


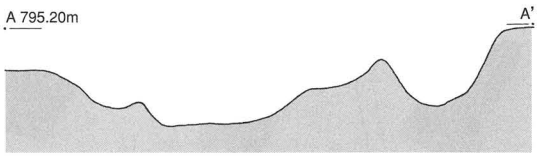
6 号土坑



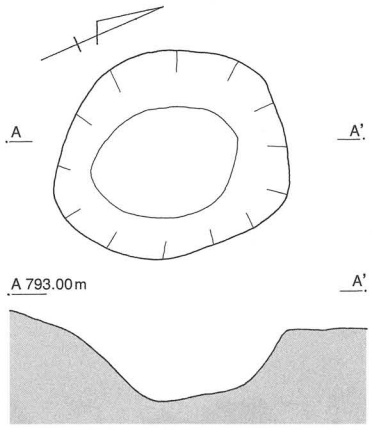


2 号土坑・ピット 1

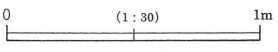




4 号土坑・ピット 2 ～ 5



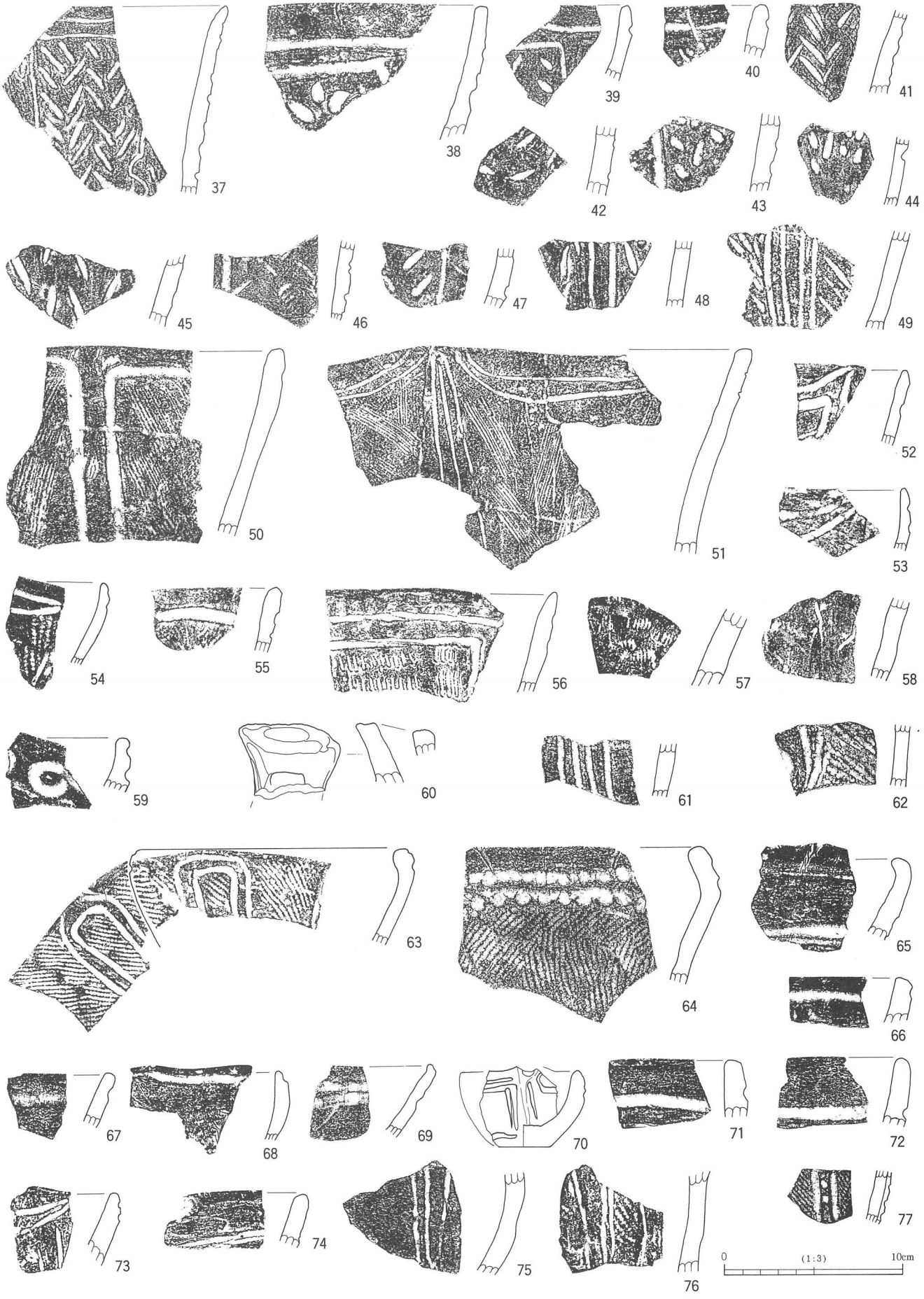
7 号土坑



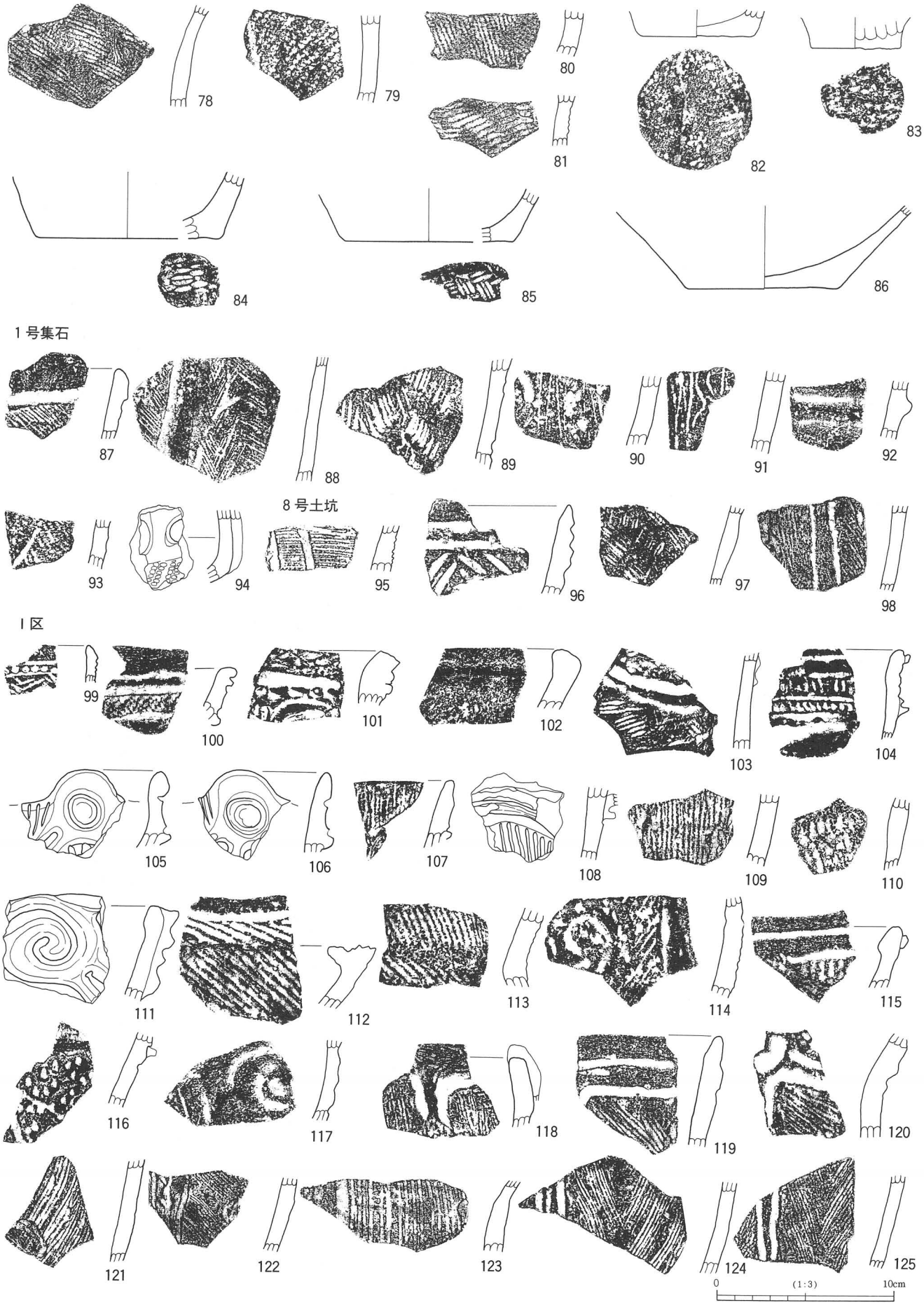
第 8 図　1 ～ 7 号土坑

1号住
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm

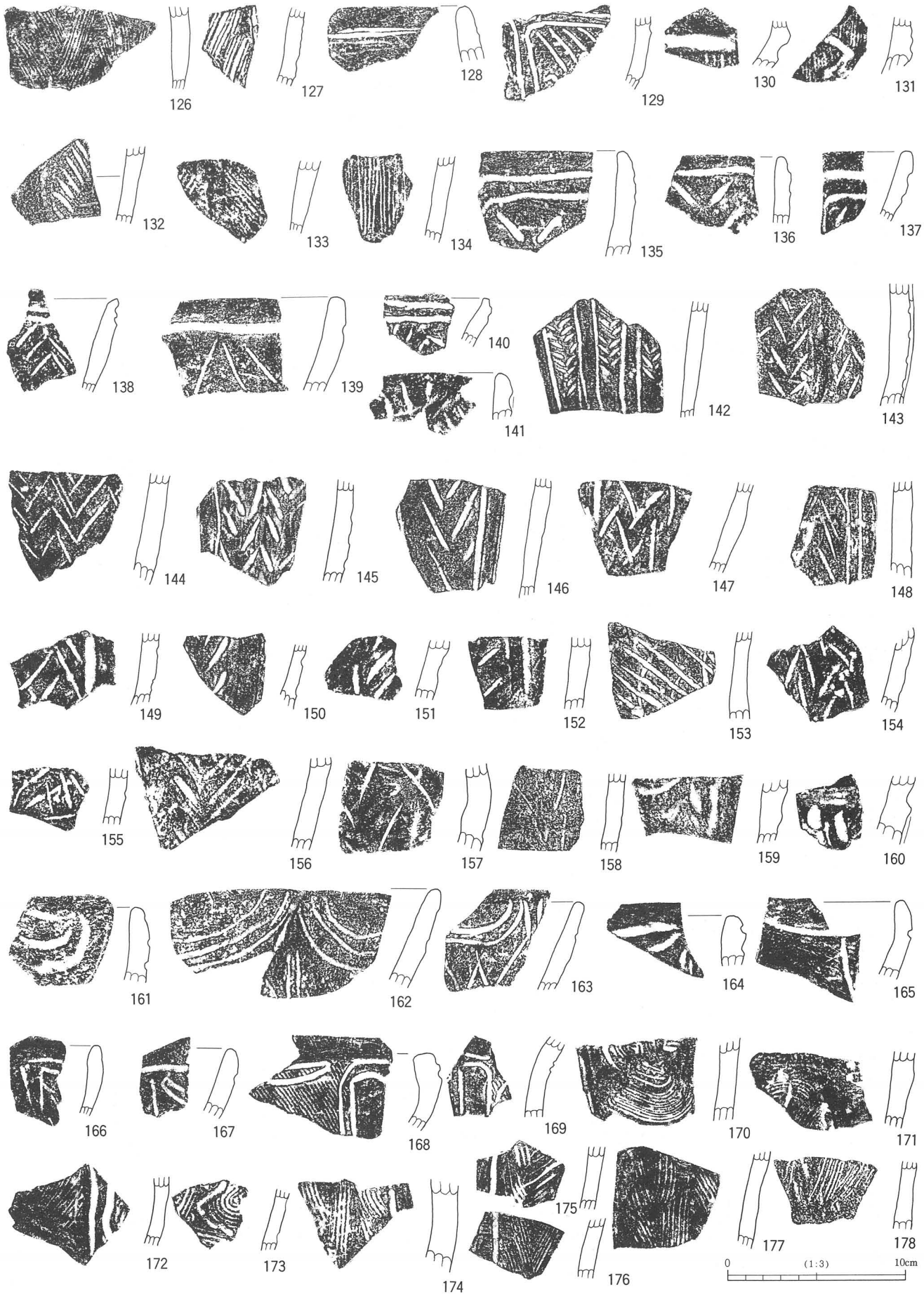
第9図　出土土器①


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
0
(1:3)
10cm

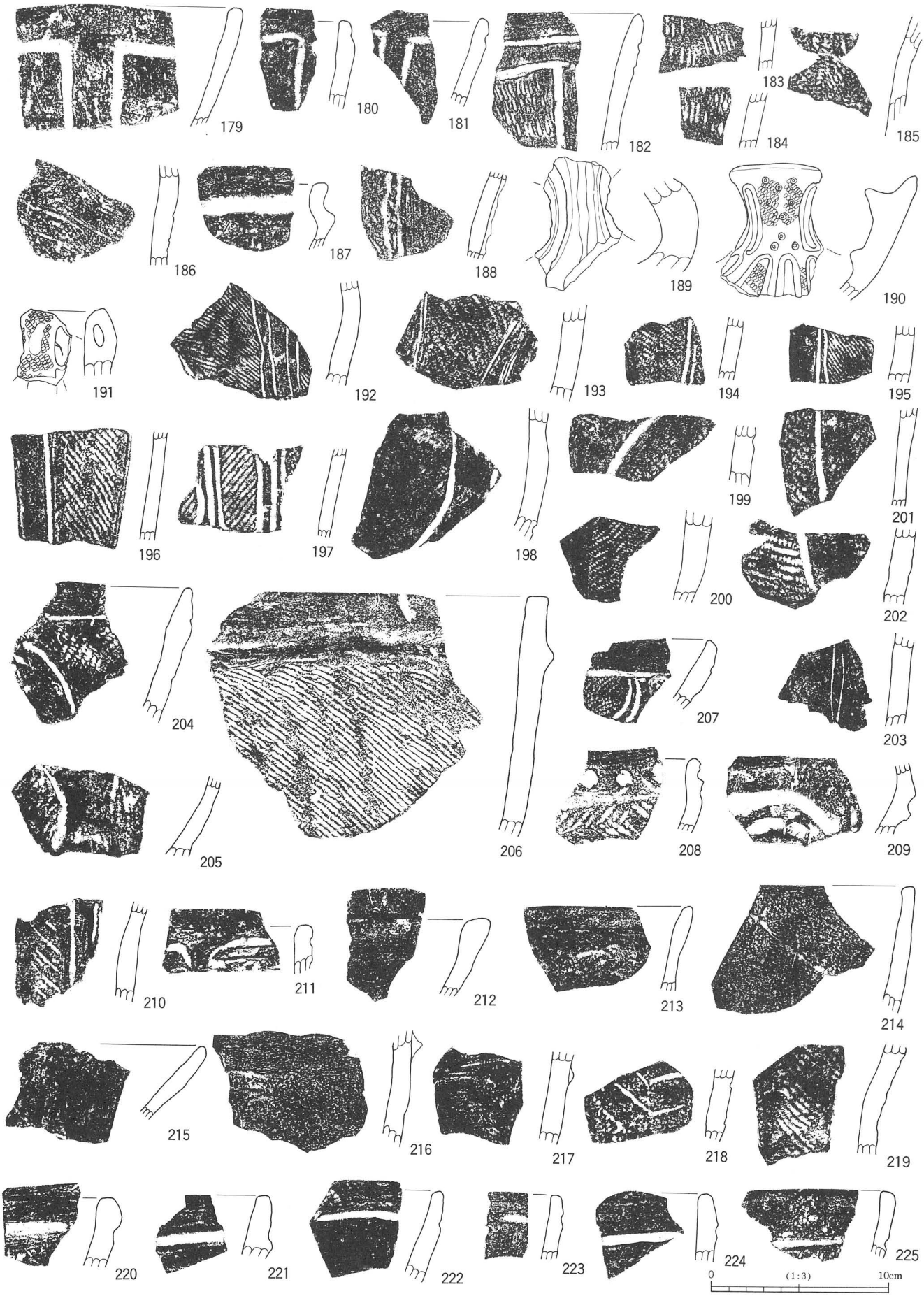
第10図　出土土器②


78
79
80
81
82
83
84
85
86
1号集石
87
88
89
90
91
92
8号土坑
93
94
95
96
97
98
I区
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
0
(1:3)
10cm

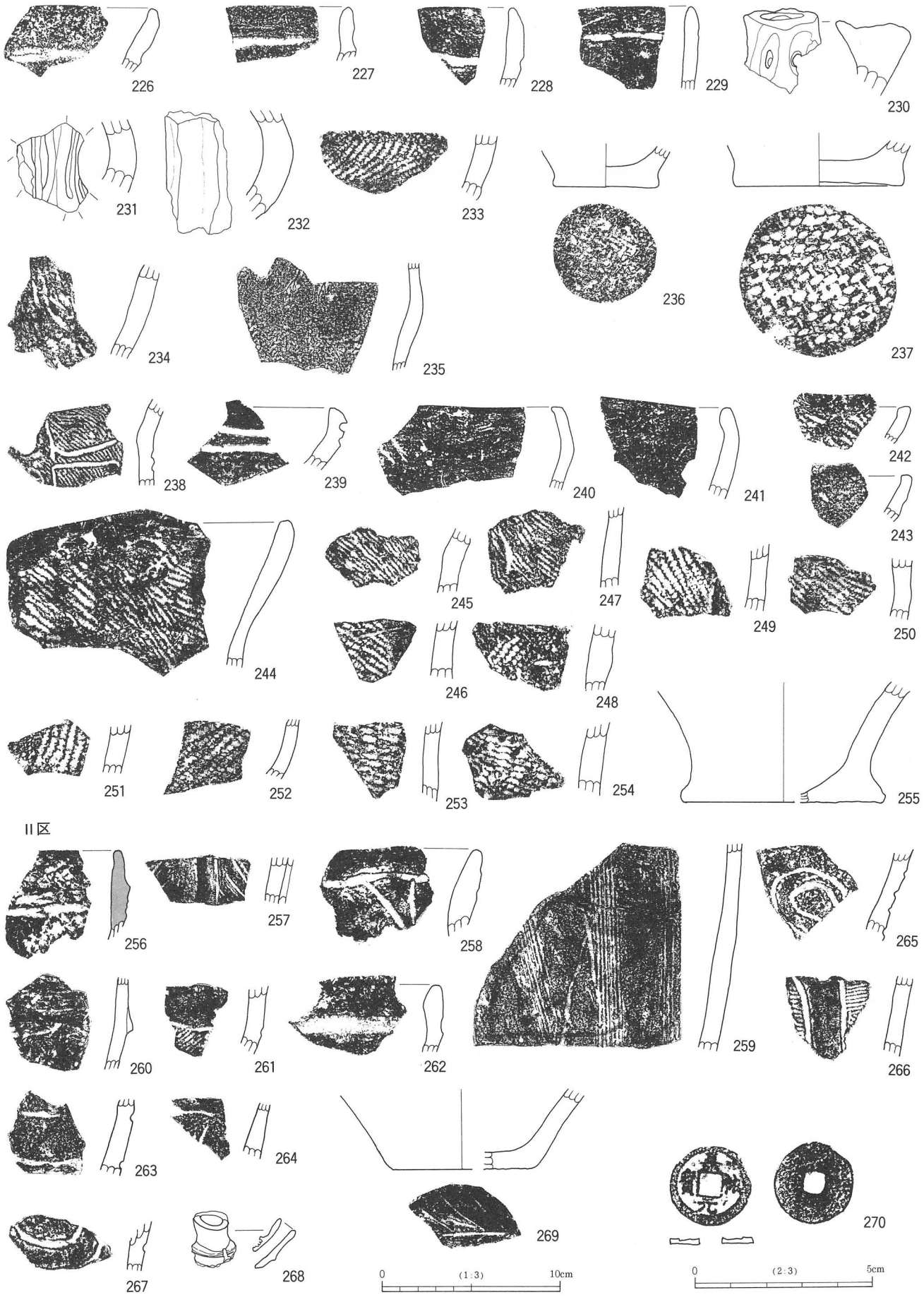
第11図　出土土器③


126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
0
(1:3)
10cm

第12図　出土土器④


179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
0
(1:3)
10cm

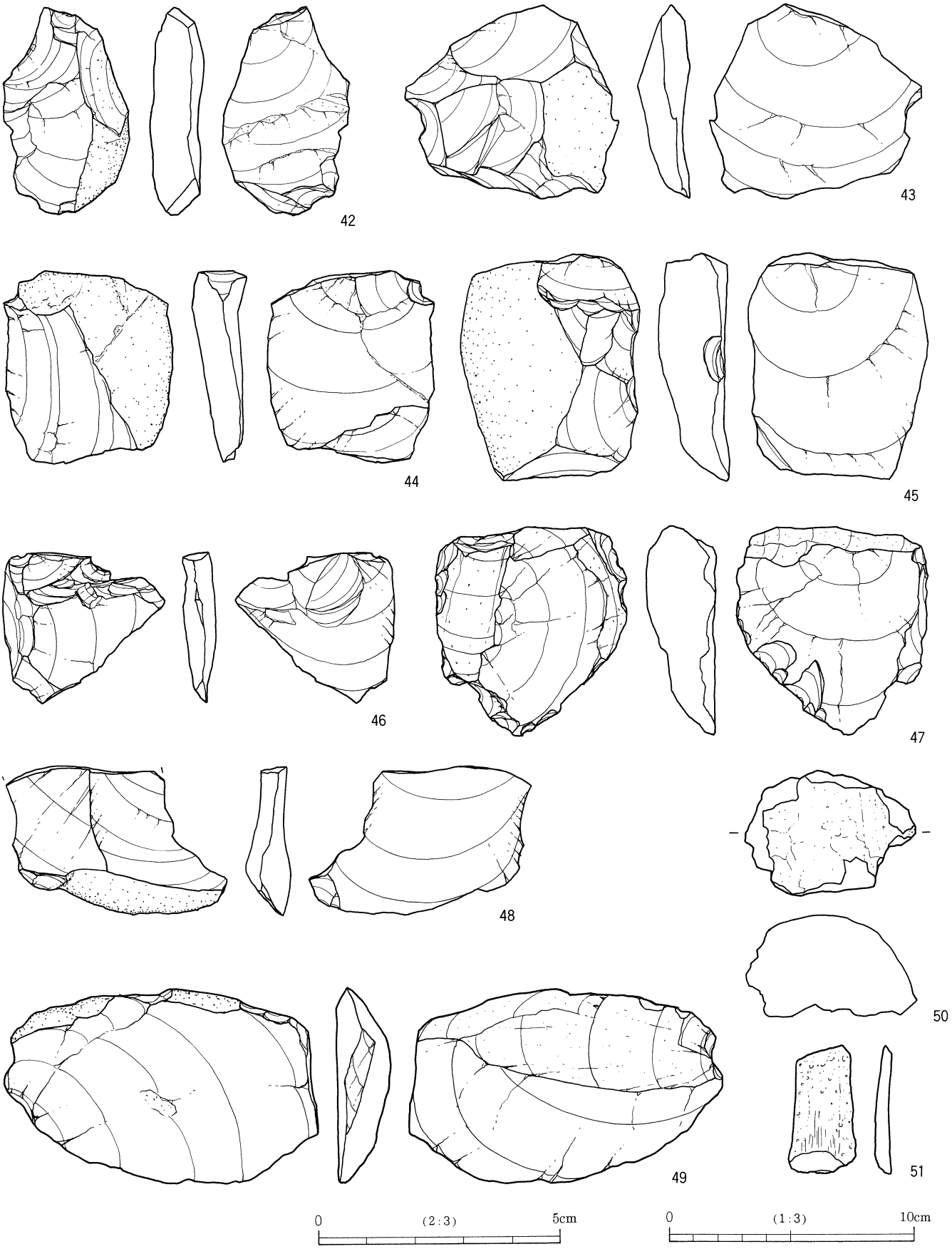
第13図　出土土器⑤


226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
II区
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
0 (1:3) 10cm
0 (2:3) 5cm

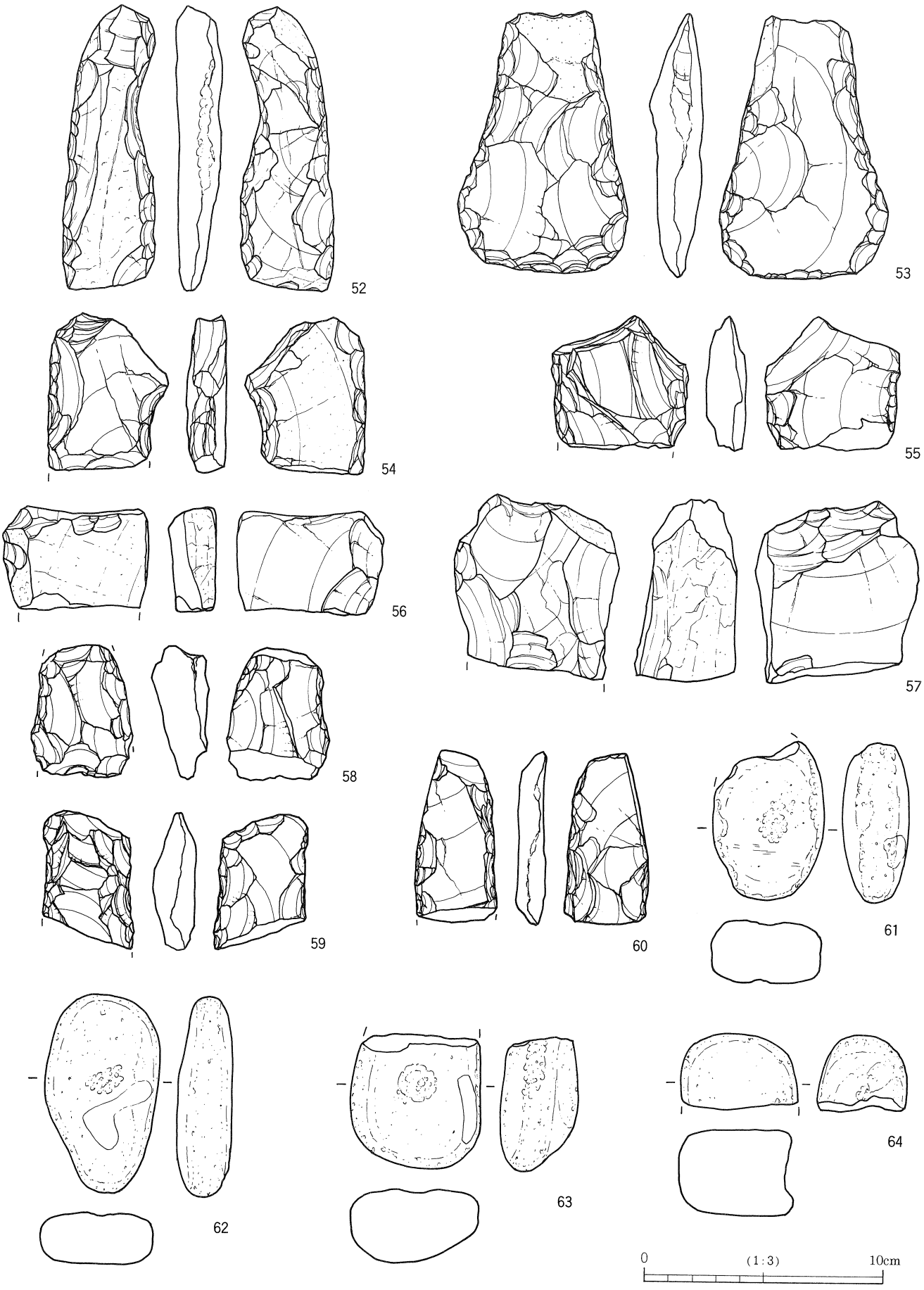
第14図　出土土器⑥

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
(2:3)
5cm

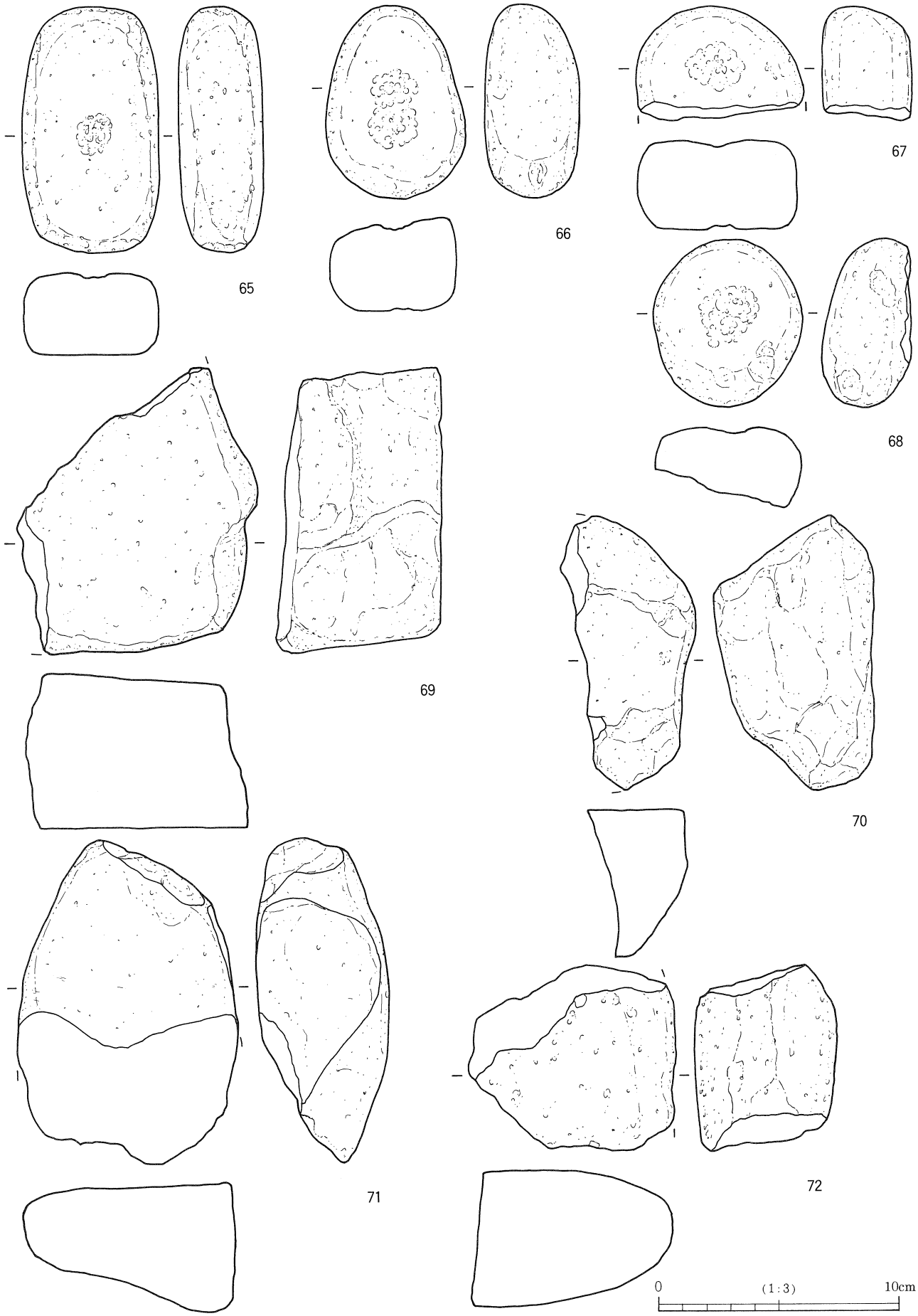
第15図　出土石器①



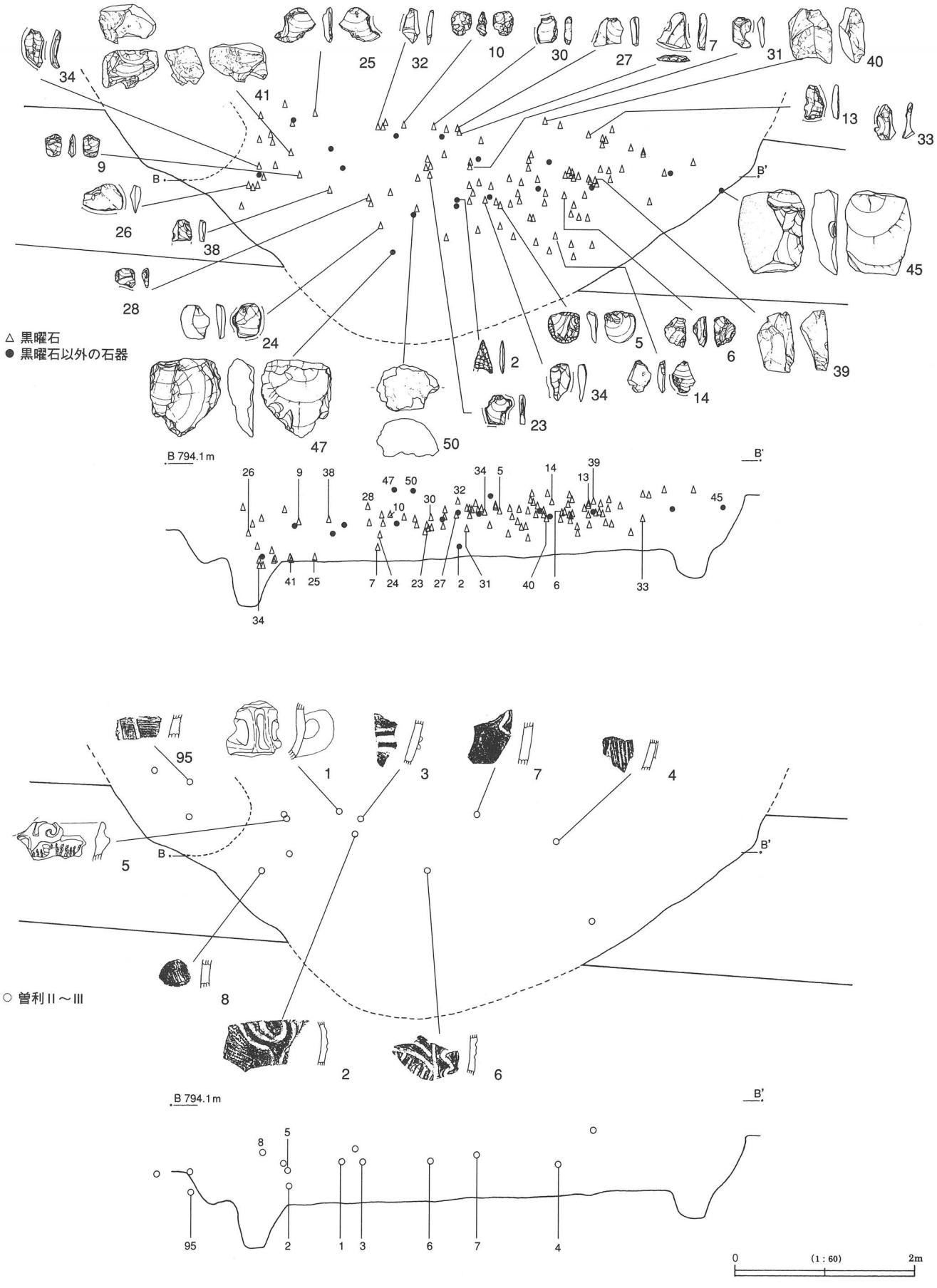
第16図　出土石器②



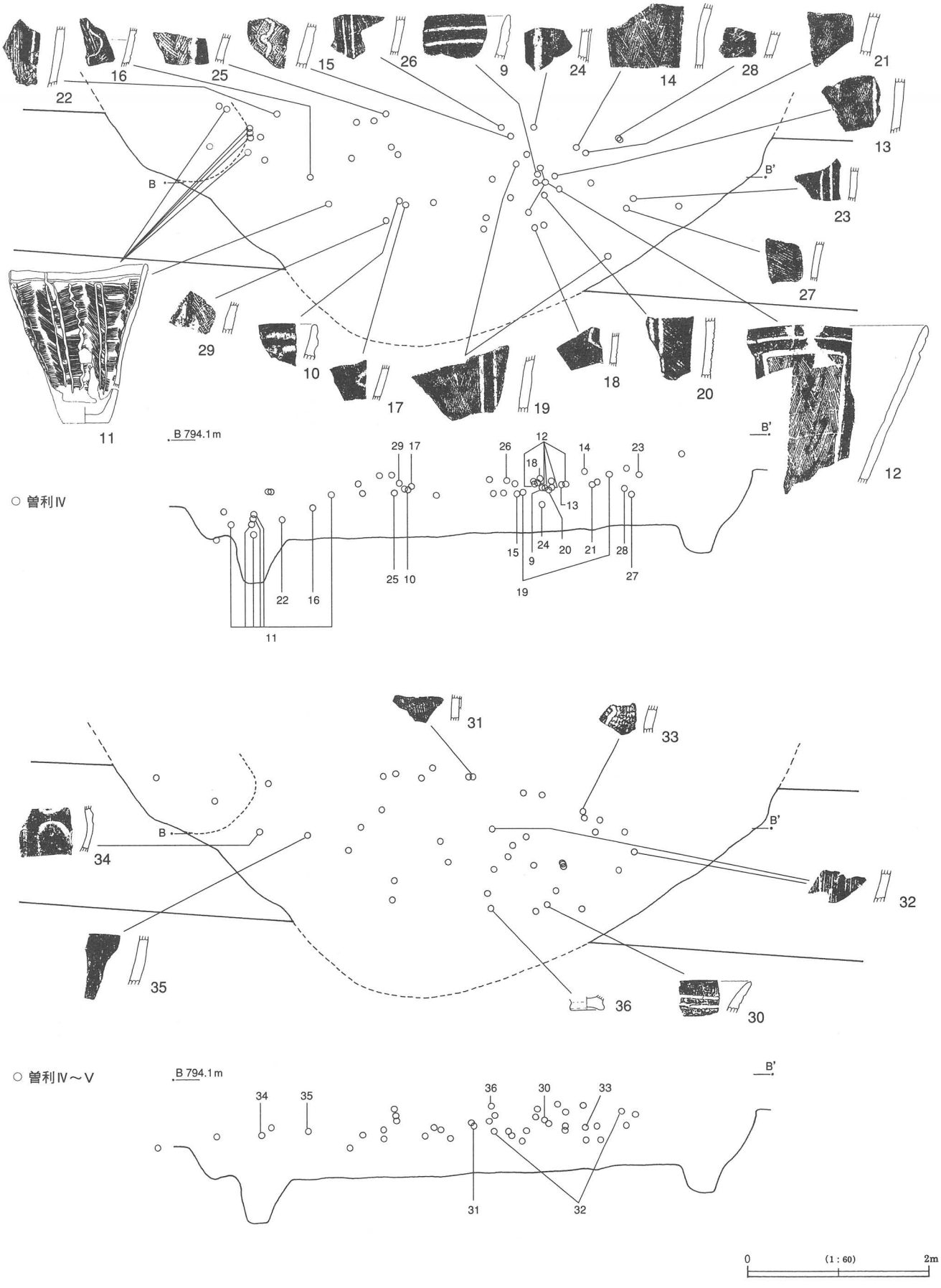
第17図　出土石器③



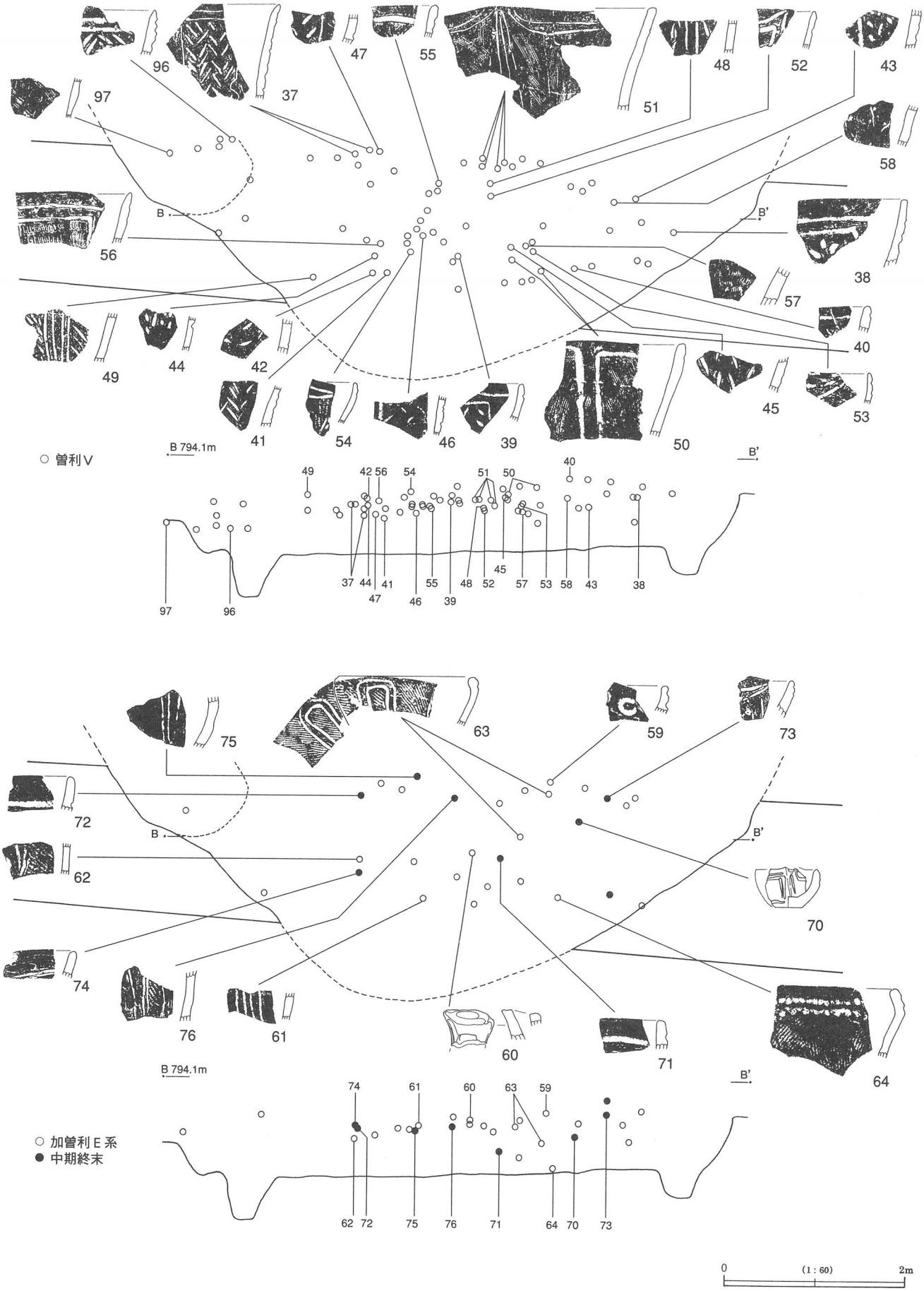
第18図　出土石器④



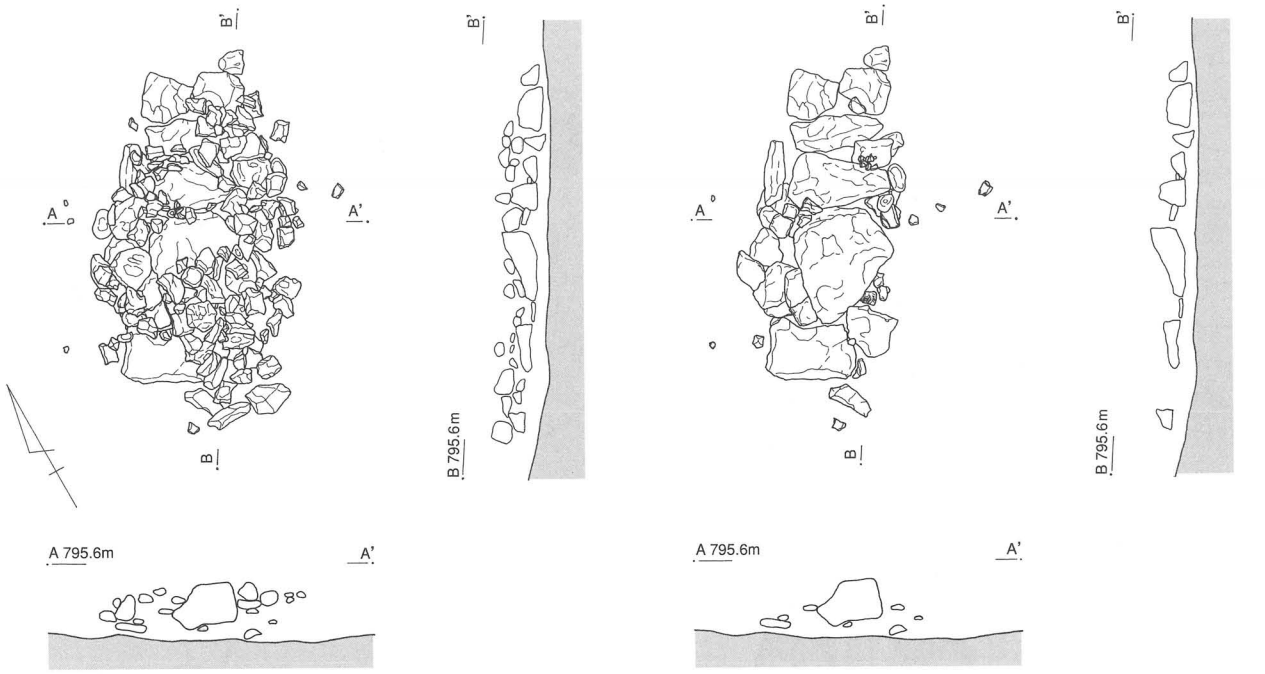
第19図　1号住居跡遺物出土状況①



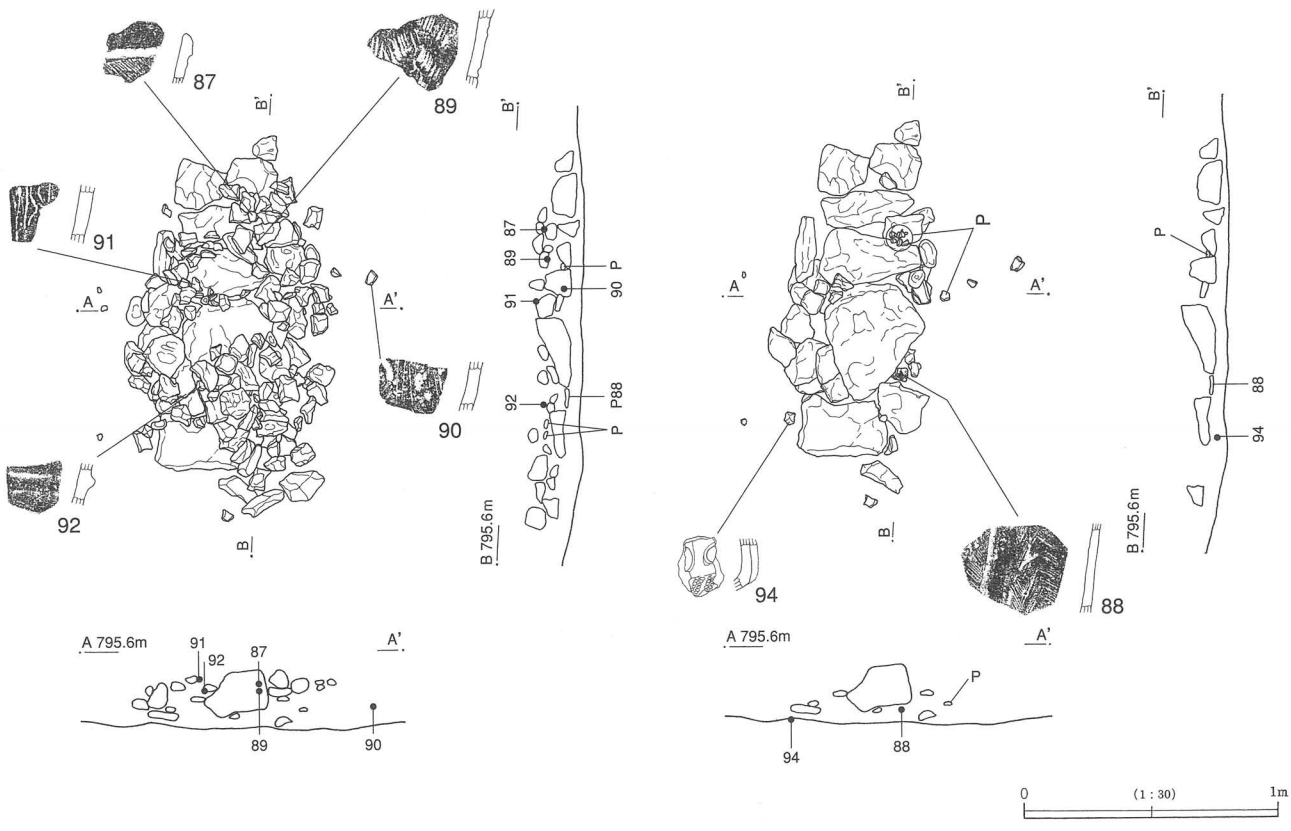
第20図　1号住居跡遺物出土状況②



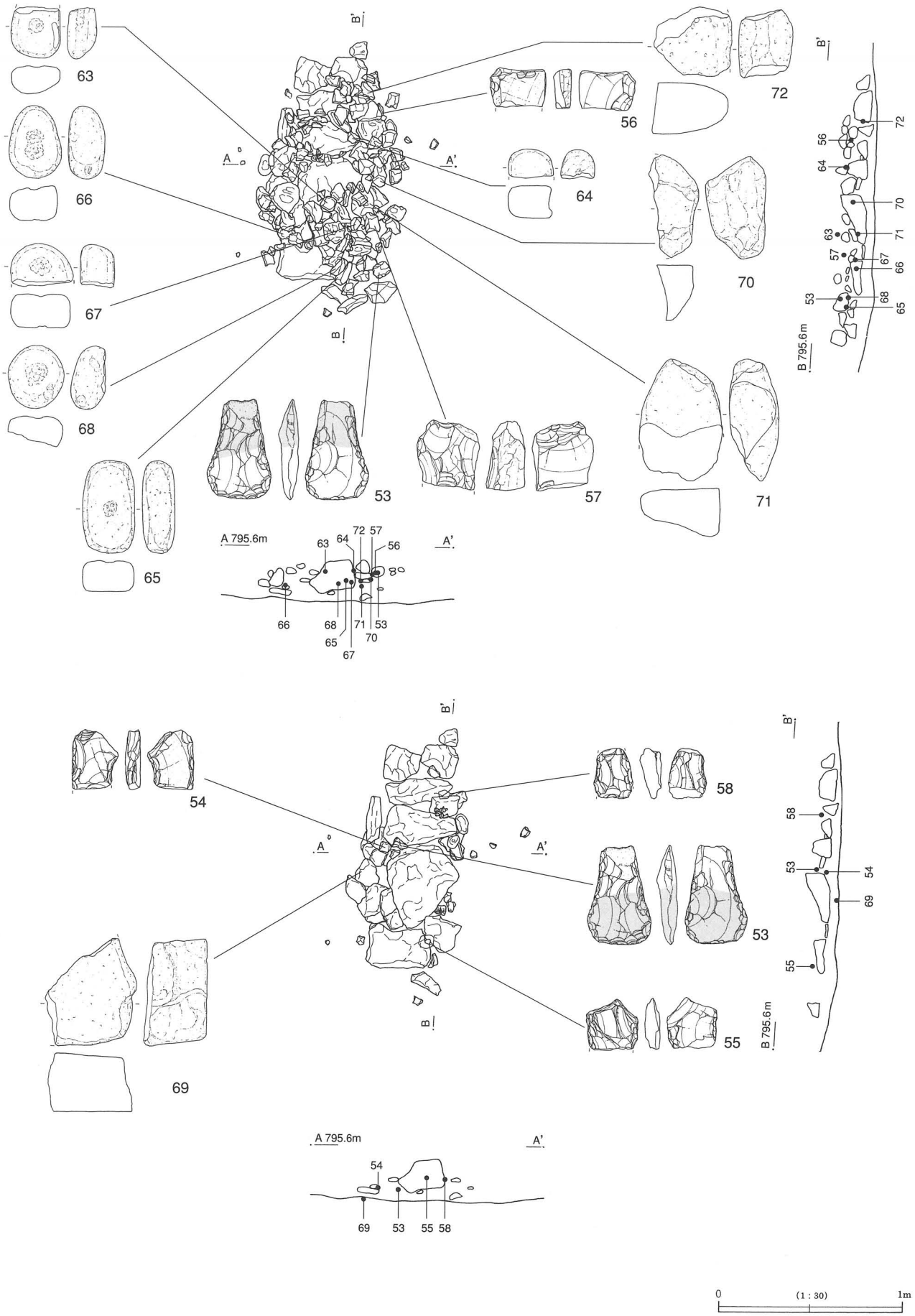
第21図　１号住居跡遺物出土状況③



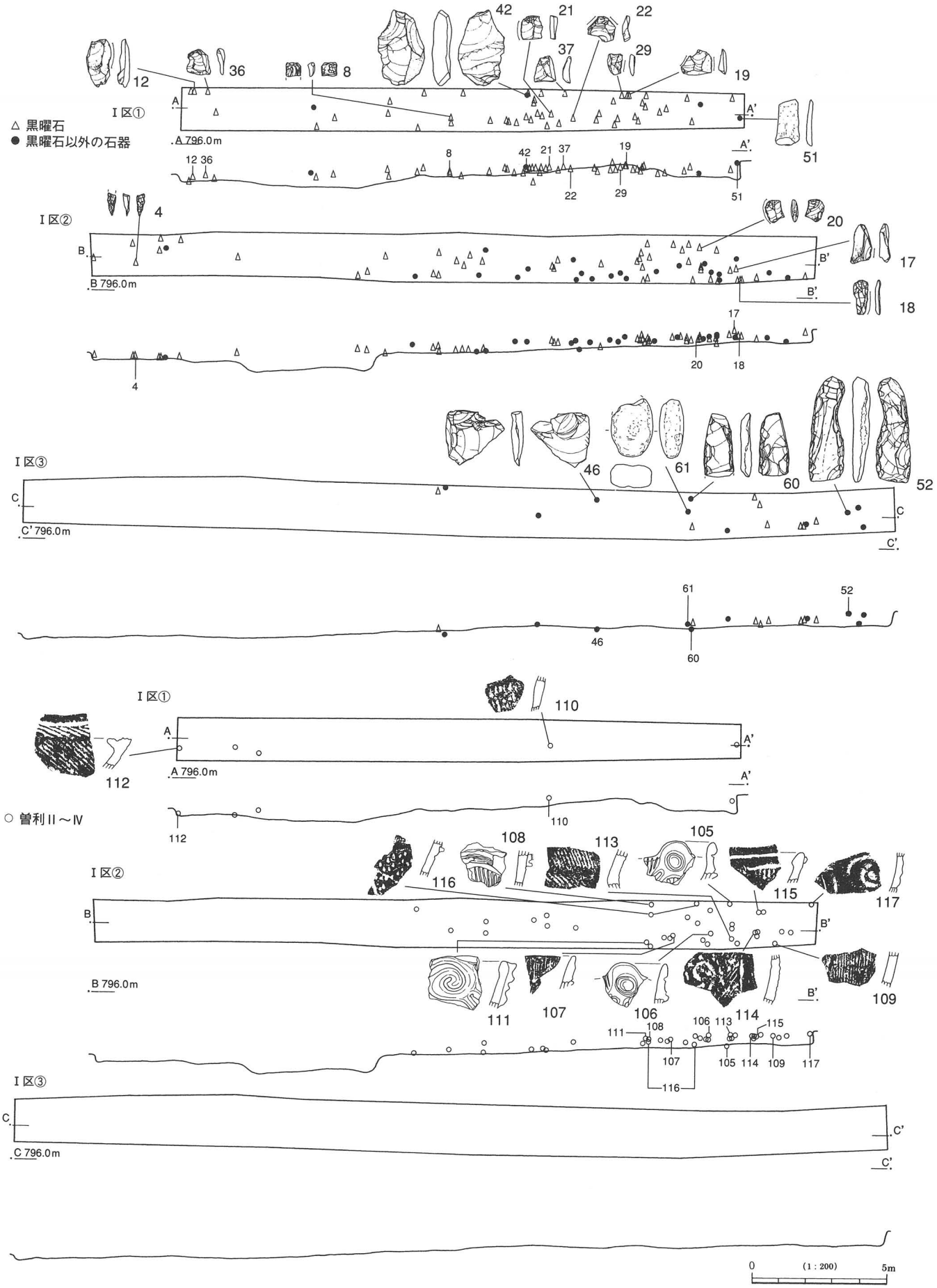
1号集石



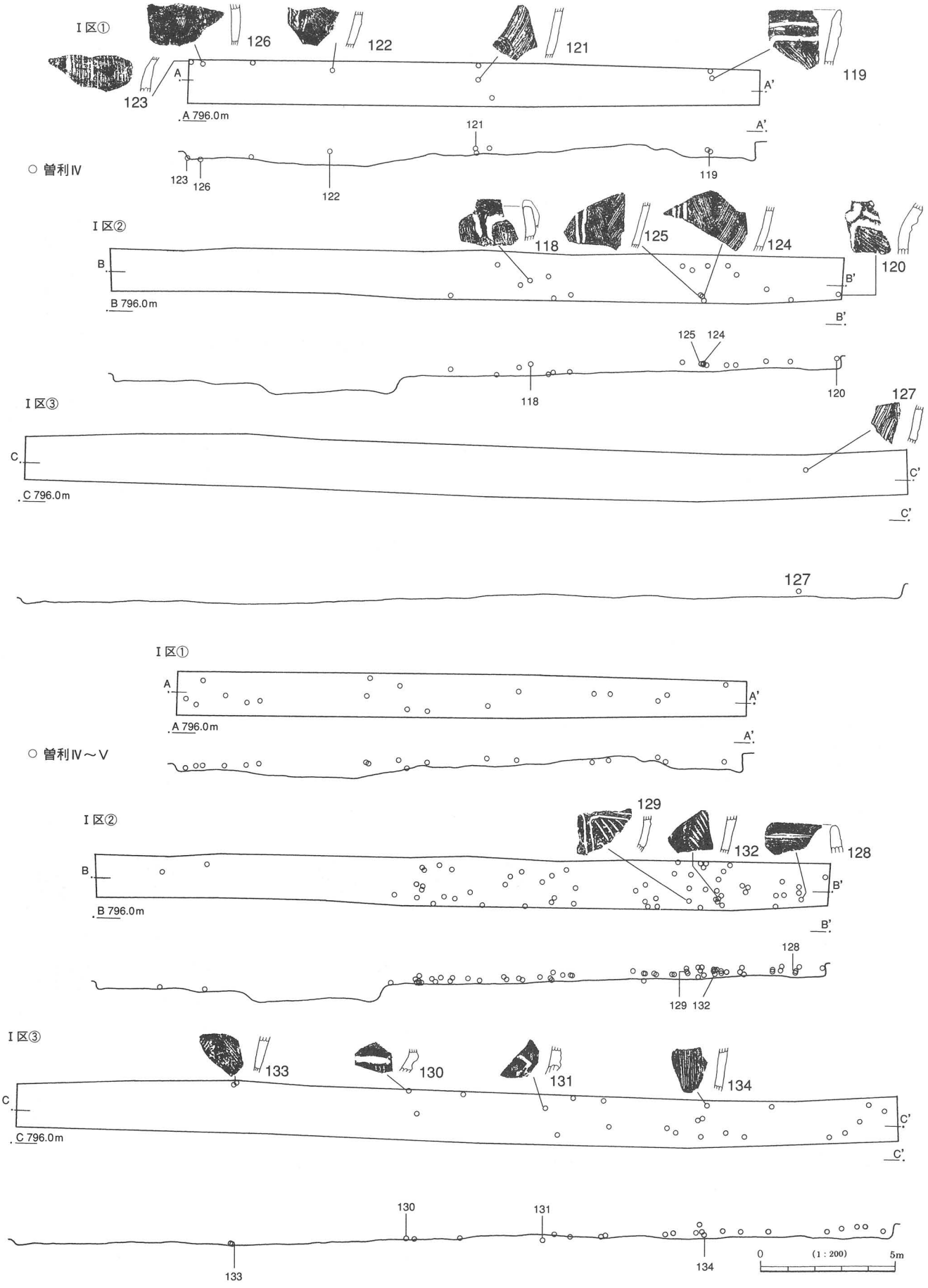
第22図　1号集石①


63
66
67
68
65
53
57
56
64
72
70
71
69
54
58
55
A
A'
B
B'
A 795.6m
B 795.6m
0
(1 : 30)
1m

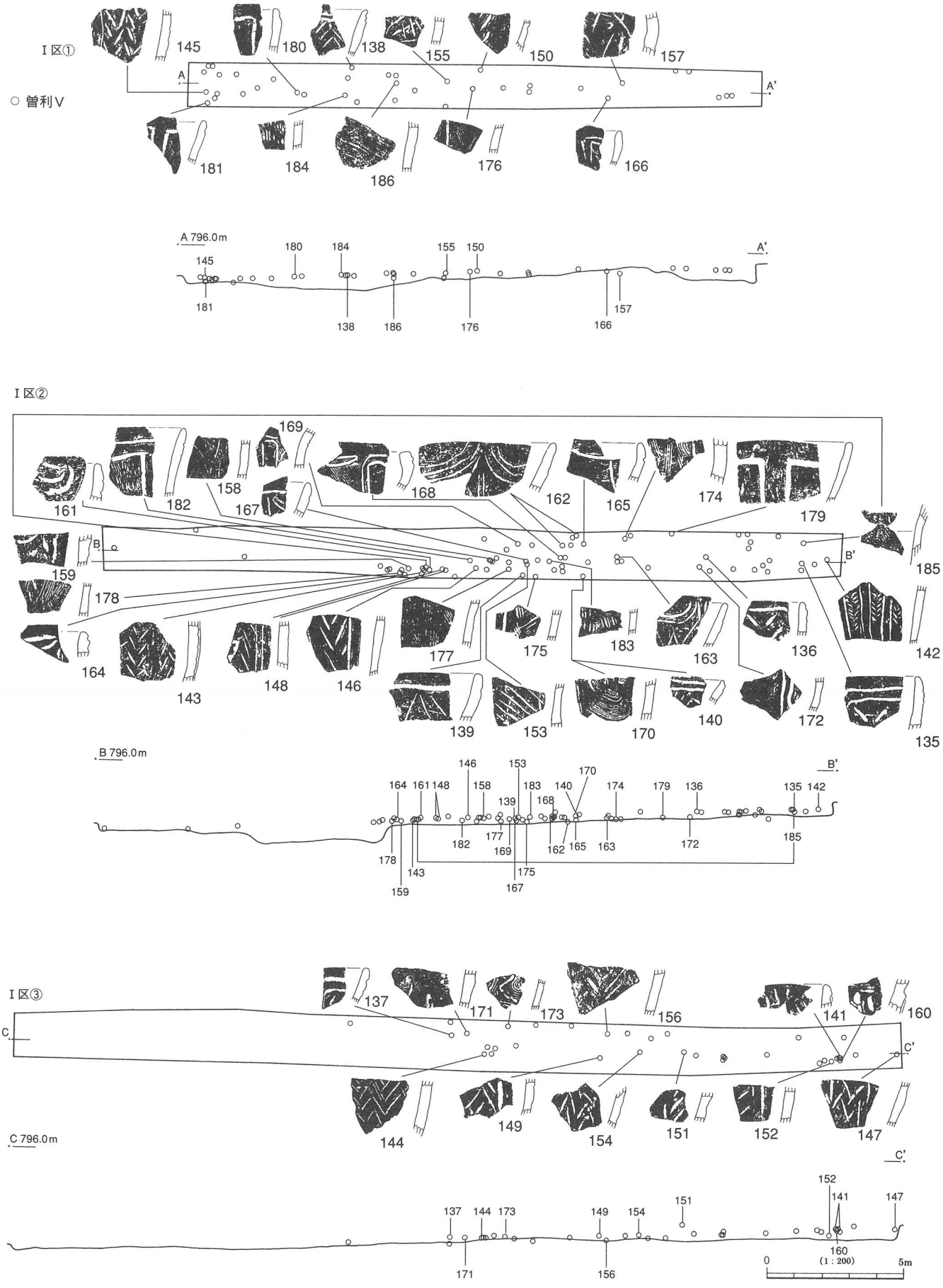
第23図　1号集石②



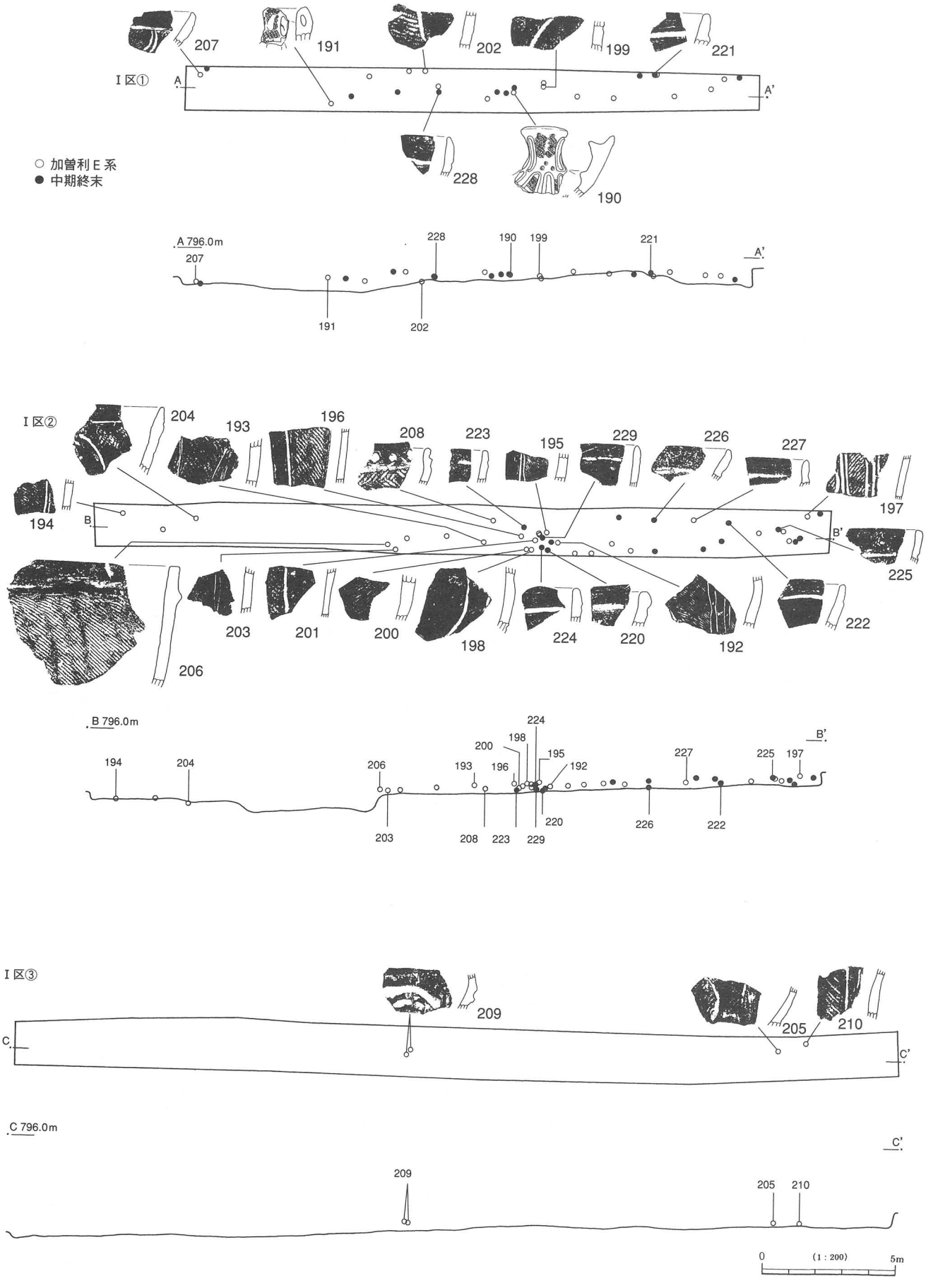
第24図　Ⅰ区遺物出土状況①



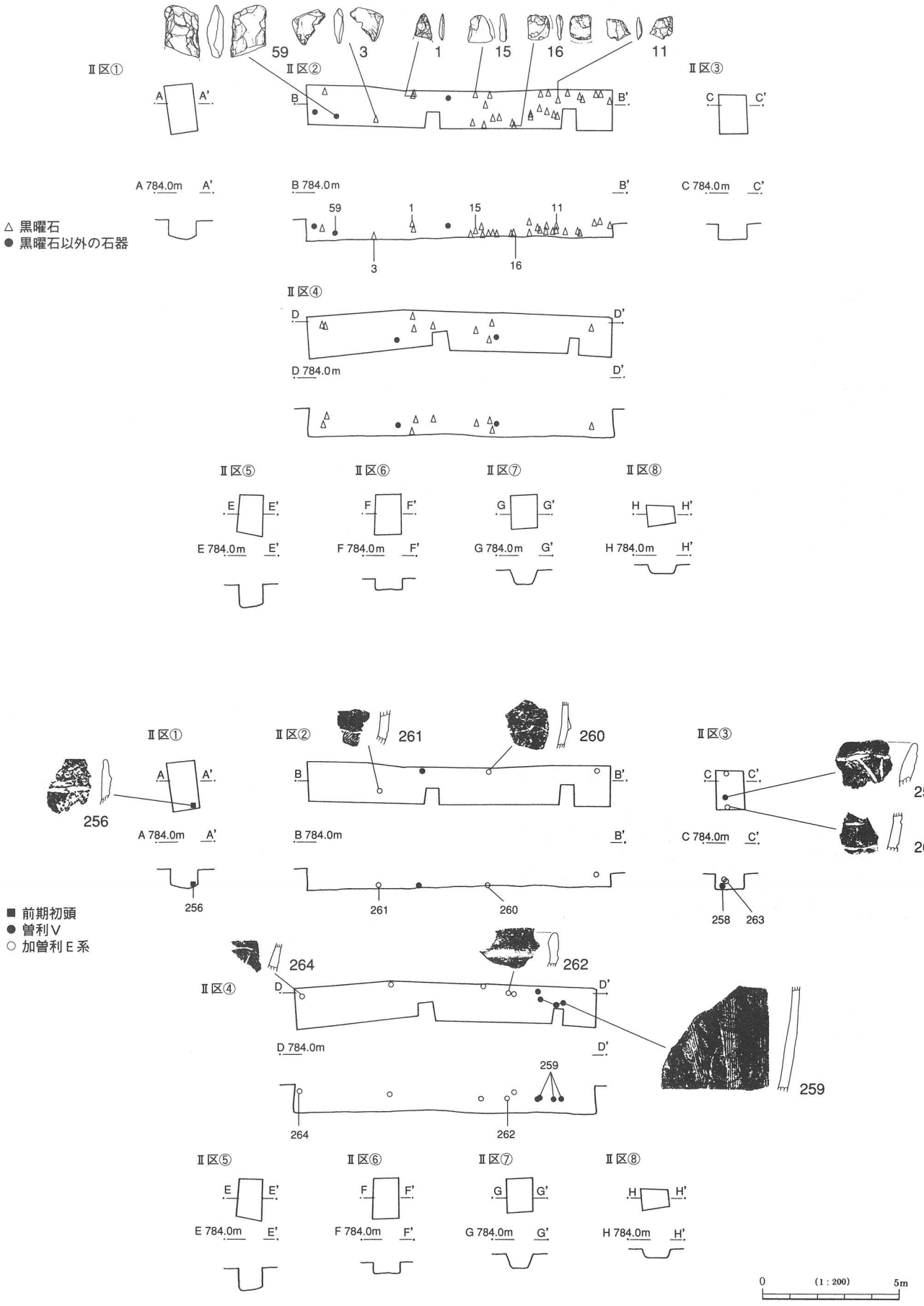
第25図　Ⅰ区遺物出土状況②



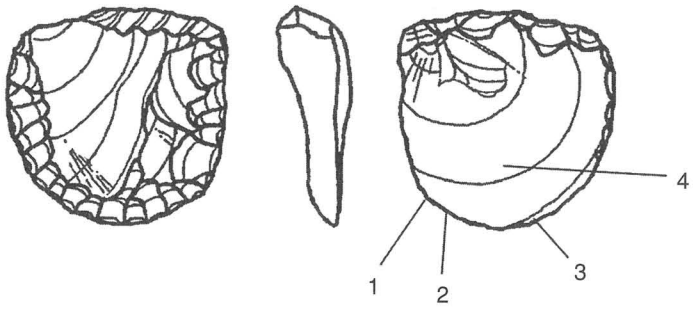
第26図　Ⅰ区遺物出土状況③

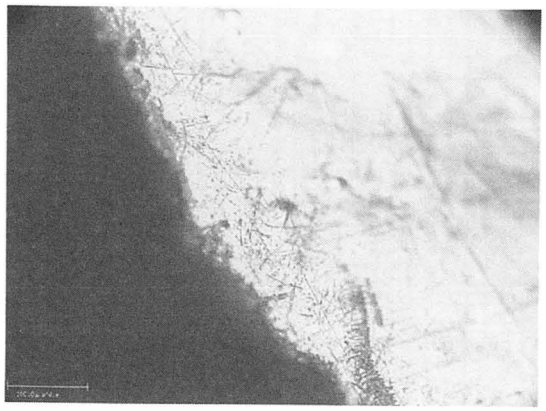


第27図　Ⅰ区遺物出土状況④



第28図　Ⅱ区遺物出土状況

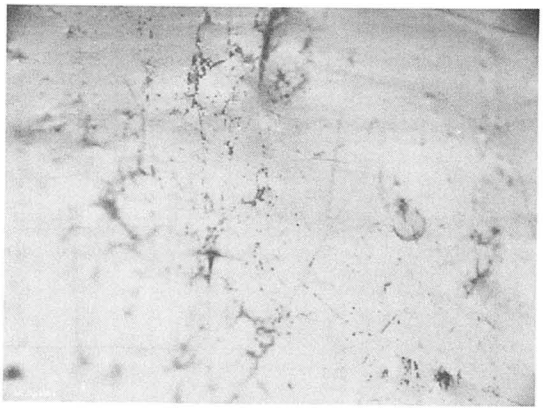




1　Eタイプ

2　Eタイプ

3　Eタイプ



4　使用痕なし

観察所見
主要剥離面側に顕著な使用痕光沢と細かな線状痕が観察される（写真１～３）。背面側の縁辺部には微細剥離がともなっている。使用痕光沢タイプは、Eタイプである。推定される被加工物は、皮である。線状痕は、刃部にほぼ直交している（線状痕が非常に細いのが特徴である）。石器の使用法としては、掻き取りが考えられる。

第29図　掻器（第15図５）の使用痕

図版番号	図番号	器種	石材	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	所見	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
第15図	1	石鏃（凹基）	黒曜石	SP	なし	不明	不明		19.6	12.8	4.0	0.7
第15図	2	石鏃（凹基）	珪岩	SP	なし	不明	不明		24.4	14.0	4.1	0.8
第15図	3	石錐	黒曜石	HP	なし	HD	縦長剥片		25.7	24.2	7.6	2.2
第15図	4	石錐	黒曜石	HP	なし	不明	不明	基部欠損	16.9	6.2	5.4	0.3
第15図	5	掻器	黒曜石	HP	なし	HD	横長剥片	微細剥離顕著	23.6	23.7	8.1	2.9
第15図	6	二次加工剥片	黒曜石	なし	折取り	HvD	剥片		22.9	16.0	10.8	3.1
第15図	7	二次加工剥片	黒曜石	なし	折取り	HD	縦長剥片	右側辺と末端辺に微細剥離	27.1	25.3	6.4	3.3
第15図	8	両極石器1	黒曜石	なし	HvD	HD	剥片		10.9	12.0	5.3	0.6
第15図	9	両極石器1	黒曜石	なし	なし	HvD	剥片		17.3	12.4	5.5	1.0
第15図	10	両極石器1	黒曜石	なし	なし	HvD	剥片		18.2	15.8	8.1	1.6
第15図	11	両極石器1	黒曜石	なし	なし	HvD	剥片		16.4	16.6	3.9	0.8
第15図	12	両極石器2	黒曜石	なし	なし	HvD	剥片	右側辺に微細剥離	36.6	18.3	9.3	4.2
第15図	13	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HvD	縦長剥片	右側辺と末端辺に微細剥離	25.6	15.2	5.7	1.5
第15図	14	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HvD	縦長剥片	右側辺と末端辺に微細剥離	24.0	17.3	5.9	1.7
第15図	15	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HvD	縦長剥片	右側辺に微細剥離	20.5	18.4	5.6	1.4
第15図	16	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HvD	縦長剥片	末端辺と右側辺に微細剥離	18.5	15.8	4.8	0.9
第15図	17	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	右側辺に微細剥離	29.9	16.0	8.5	2.4
第15図	18	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	右側辺に微細剥離	26.6	10.4	4.4	0.9
第15図	19	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	横長剥片	右側辺と左側辺に微細剥離	19.5	23.9	6.4	1.9
第15図	20	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離、被熱	17.3	14.8	5.5	1.1
第15図	21	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離	18.3	16.2	6.2	1.3
第15図	22	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	剥片	両側辺に微細剥離	19.6	20.9	6.1	1.6
第15図	23	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	周縁部に微細剥離	22.2	20.5	4.7	1.5
第15図	24	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	両側辺と末端辺に微細剥離	25.8	21.6	7.0	2.8
第15図	25	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	横長剥片	左側辺に微細剥離	25.8	30.5	7.7	3.2
第15図	26	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	横長剥片	右側辺と末端辺に微細剥離	20.4	29.9	7.7	3.4
第15図	27	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離	21.6	22.1	6.5	2.0
第15図	28	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	横長剥片	末端辺に微細剥離	14.9	14.7	5.3	1.0
第15図	29	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	右側辺に微細剥離	16.5	11.4	4.3	0.6
第15図	30	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離	20.8	15.3	5.7	1.5
第15図	31	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	右側辺に微細剥離	23.0	13.6	5.2	1.0
第15図	32	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離	25.8	12.9	4.3	0.8
第15図	33	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	左側辺に微細剥離	26.7	15.7	9.0	1.4
第15図	34	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	両側辺に微細剥離	28.5	14.7	7.6	1.9
第15図	35	使用痕剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片	両側辺に微細剥離	27.6	15.2	6.8	1.9
第15図	36	剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片		19.9	18.1	6.0	1.2
第15図	37	剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片		20.5	16.2	6.4	1.4
第15図	38	剥片	黒曜石	なし	なし	HD	縦長剥片		16.2	14.7	5.3	0.9
第15図	39	原石	黒曜石	なし	なし	なし	角礫		45.2	27.1	20.5	20.1
第15図	40	原石	黒曜石	なし	なし	なし	角礫		41.3	32.6	19.0	22.3
第15図	41	石核	黒曜石	なし	なし	なし	角礫		28.9	42.6	28.2	31.5
第16図	42	剥片	頁岩	なし	なし	HD	縦長剥片		57.7	35.6	15.3	26.1
第16図	43	剥片	ホルンフェルス	なし	なし	HD	剥片		53.7	58.9	14.9	36.4
第16図	44	剥片	頁岩	なし	なし	HD	剥片		53.4	46.7	15.7	34.8
第16図	45	剥片	ホルンフェルス	なし	なし	HvD	縦長剥片		62.4	49.2	19.6	59.4
第16図	46	剥片	頁岩	なし	なし	HvD	横長剥片		41.9	44.6	9.7	13.9
第16図	47	剥片	頁岩	HD	なし	HvD	縦長剥片		57.0	52.1	19.6	57.9
第16図	48	剥片	頁岩	なし	なし	HvD	剥片		40.9	59.8	12.4	20.2
第16図	49	剥片	砂岩	なし	なし	HD	横長剥片		54.1	87.2	15.3	74.3
第16図	50	石棒	凝灰岩	不明	不明	不明	不明	被熱、破損激しい	70.0	93.4	56.6	278.8
第16図	51	磨製石斧	緑色片岩	研磨	敲打	不明	不明	基部断片	71.0	36.3	9.6	27.5
第17図	52	打製石斧	砂岩	HvD/刃潰し	HD	不明	横長剥片		160.2	53.2	26.5	238.5
第17図	53	打製石斧	砂岩	HvD/刃潰し	HD	不明	横長剥片		147.8	95.5	30.5	409.1
第17図	54	打製石斧	ホルンフェルス	HD	なし	不明	剥片	裏面側が風化による摩耗激しい	88.7	67.6	22.8	178.7
第17図	55	打製石斧	砂岩	HD	HD	不明	横長剥片		75.2	76.1	22.7	154.9
第17図	56	打製石斧	砂岩	HD	HD	不明	横長剥片	頂部断片	59.7	82.5	27.1	170.2
第17図	57	打製石斧	砂岩	HD	HD	HD	剥片	頂部断片	103.0	91.6	56.9	527.0
第17図	58	打製石斧	砂岩	HvD	HD	不明	横長剥片	基部、刃部欠損	74.9	57.9	31.4	136.4
第17図	59	打製石斧	砂岩	HD	HD	不明	横長剥片	刃部欠損	76.9	52.2	23.8	97.6
第17図	60	打製石斧	砂岩	HD	なし	HvD	横長剥片	刃部欠損	96.7	47.0	17.0	106.0
第17図	61	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		90.3	63.2	37.6	310.0
第17図	62	敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		112.1	64.8	31.1	323.6
第17図	63	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		75.9	74.7	43.9	382.5
第17図	64	磨石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		43.5	66.7	50.5	158.7
第18図	65	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		137.2	76.9	47.9	789.0
第18図	66	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		107.7	78.2	53.8	557.0
第18図	67	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		64.0	93.9	50.8	376.1
第18図	68	磨石＋敲石	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		93.8	83.7	50.8	414.0
第18図	69	石皿	安山岩	なし	なし	なし	亜角礫		158.8	133.9	93.4	2,520.0
第18図	70	石皿	安山岩	なし	なし	なし	礫		152.4	75.2	89.9	942.0
第18図	71	石皿	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		180.5	124.0	74.0	2,100.0
第18図	72	石皿	安山岩	なし	なし	なし	楕円礫		103.5	116.5	79.9	1,102.0

第３表　土器出土内訳

上段：個数、下段：重量（ｇ）

大別時期	細別時期	型　式	１住	Ⅰ区	Ⅱ区	８号土坑	１号集石	ピット２	ピット４	合　計
早期末～前期初頭					1					1
					20.5					20.5
中　期			289	678	32	28	31	3	4	1,065
			6,178.7	13,002.2	702.0	455.5	585.4	45.5	36.4	21,005.7
	前　半			13	2					15
				286.0	27.9					313.9
		五領ヶ台		2	2					4
				26.2	27.9					54.1
		狢　沢		1						1
				36.9						36.9
		不　明		10						10
				222.9						222.9
	後　半		280	518	30	23	13	2	1	867
			5,907.2	9,746.6	674.1	321.7	282.0	21.4	5.0	16,958.0
		曽　利	2	12	1					15
			21.0	271.2	39.4					331.6
		曽　利Ⅰ		1						1
				19.0						19.0
		曽　利Ⅱ	4	2						6
			181.7	25.6						207.3
		曽　利Ⅱ～Ⅲ	3	16						19
			54.4	354.5						408.9
		曽　利Ⅲ	4	5		3				12
			72.7	225.9		50.0				348.6
		曽　利Ⅲ～Ⅳ	2	22						24
			64.2	414.4						478.6
		曽　利Ⅳ	42	24		2	1			69
			1,074.3	605.6		43.5	22.7			1,746.1
		曽　利Ⅳ～Ⅴ	51	125		5				181
			548.7	1,370.9		65.9				1,985.5
		曽　利Ⅴ	66	159	5	7	6			243
			1,808.9	3,213.4	199.6	116.9	175.4			5,514.2
		加曽利Ｅ	1	2	3		2			8
			9.8	97.7	42.4		34.2			184.1
		加曽利Ｅ１～２	1							1
			20.7							20.7
		加曽利Ｅ３～４	12	31	4	1				48
			244.3	855.9	64.2	7.2				1,171.6
		加曽利Ｅ４	7	14	1					22
			342.8	730.7	32.0					1,105.5
		不　明	85	105	16	5	4	2	2	219
			1,463.7	1,561.8	296.5	38.2	49.7	21.4	14.6	3,445.9
	終　末		7	24		1				32
			219.9	466.6		26.1				712.6
	不　明		2	123		4	18	1	3	151
			51.6	2,503.0		107.7	304.4	24.1	31.4	3,022.2
後　期			1	9						10
			10.7	199.6						210.3
	初　頭	称名寺	1	5						6
			10.7	67.9						78.6
	後　半			2						2
				26.1						26.1
	不　明			2						2
				105.6						105.6
不　明			177	569	67	8				821
			2,056.9	6,765.3	625.3	84.5				9,532.0
小　計			467	1,256	100	36	31	3	5	1,898
			8,246.3	19,967.1	1,347.8	540.0	586.4	45.5	36.4	30,769.5
平　安					6					6
					13.9					13.9
中世以降					2					2
					10.5					10.5
近　世					2					2
					18.0					18.0
現　代					1					1
					32.4					32.4
小　計					11					11
					74.8					74.8
総　合　計			467	1,256	111	36	31	3	5	1,909
			8,246.3	19,967.1	1,422.6	540.0	586.4	45.5	36.4	30,844.3

第4表　石器出土内訳

上段：個数、下段：重量（g）

器種	1住	I区	II区	8号土坑	1号集石	合計
石鏃	1		1			2
	0.8		0.7			1.5
石錐		1	1			2
		0.3	2.2			2.5
掻器	1					1
	2.9					2.9
両極石器1	2	1	1			4
	2.6	0.6	0.8			4.0
両極石器2		2				2
		8.1				8.1
二次加工剥片	2					2
	6.4					6.4
使用痕剥片	15	7	2			24
	31.3	9.8	2.3			43.4
磨製石斧		1				1
		27.5				27.5
打製石斧		4	1		6	11
		519.1	97.6		1,576.3	2,193.0
磨石	1				4	5
	252.4				1,354.6	1,607.0
敲石	2	4			5	11
	985.6	972.9			1,654.4	3,612.9
磨石＋敲石	2	1			5	8
	632.4	310.0			2,518.6	3,461.0
石皿					4	4
					4,396.0	4,396.0
石棒	1					1
	278.8					278.8
石核	1					1
	31.5					31.5
原石	2					2
	42.4					42.4
黒曜石片	100	85	34	2		221
	102.9	122.1	59.1	3.0		287.1
チャート片		1				1
		7.0				7.0
珪質頁岩片		2				2
		10.3				10.3
その他の石材片	9	12	2	1		24
	369.6	314.0	102.4	74.9		860.9
合計	139	121	42	3	24	329
	2,739.6	2,301.7	265.1	77.9	11,499.9	16,884.2

調査区全景（南から）

Ⅰ区①作業風景

Ⅰ区②作業風景

図版 2

II区全景（真上から）

II区作業風景

1号住遺物出土状況

1号住居跡

1 号集石(1)

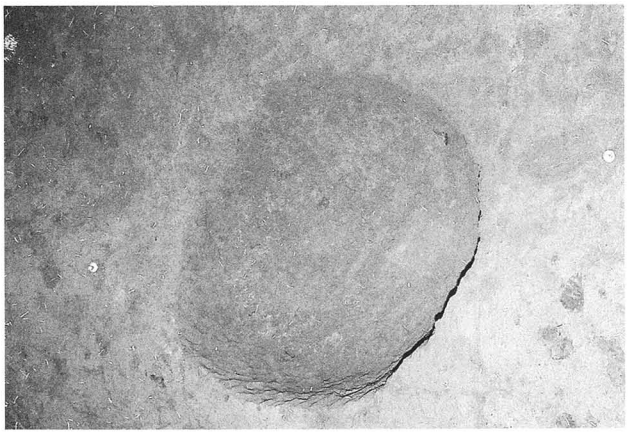
1 号集石(2)

1 号集石(3)

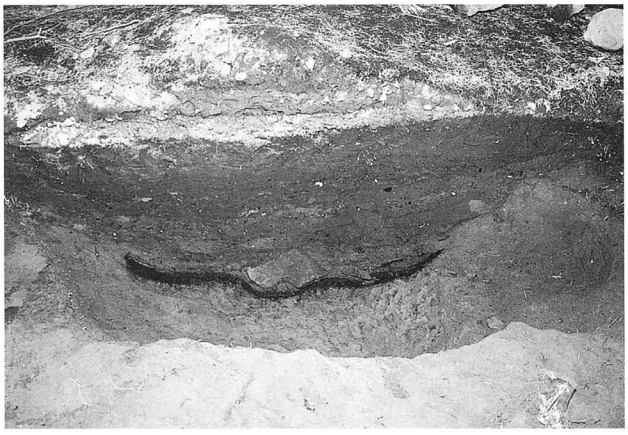
1 号集石(4)

1 号土坑

4 号土坑・ピット 2 ～ 5

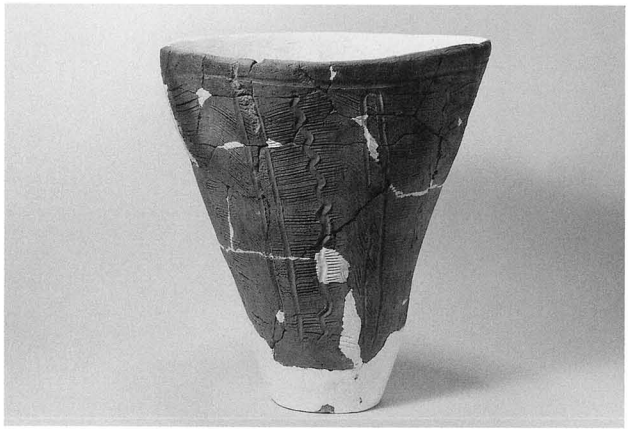


7 号土坑

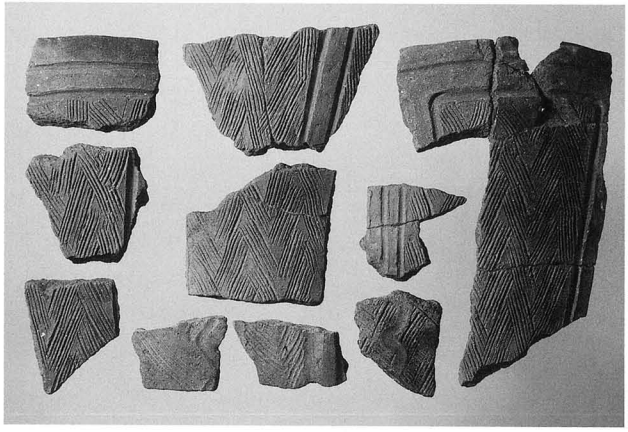


8 号土坑

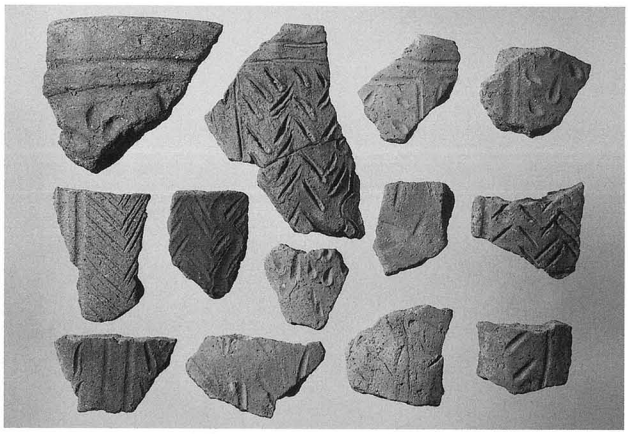
図版 4



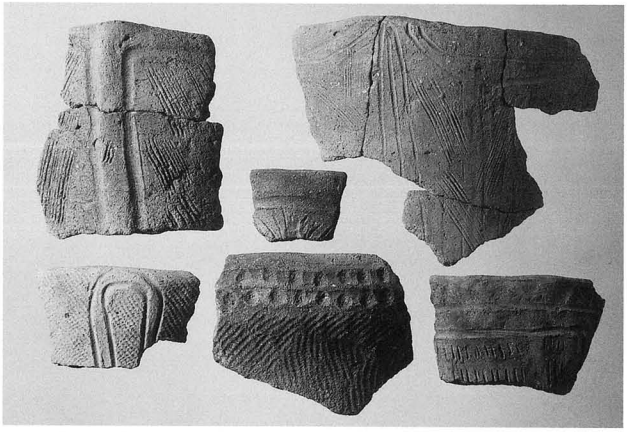
1 号住居出土土器①



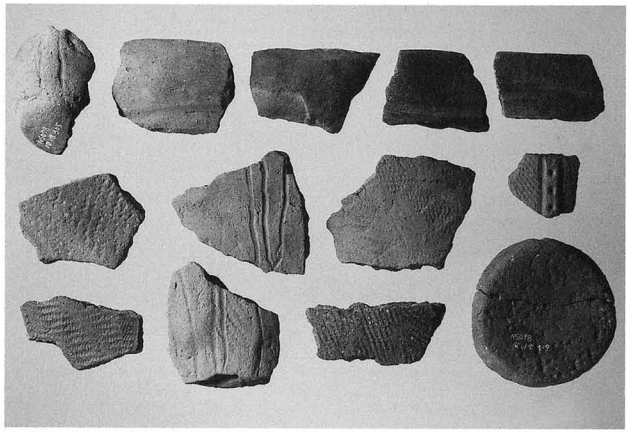
1 号住居出土土器②



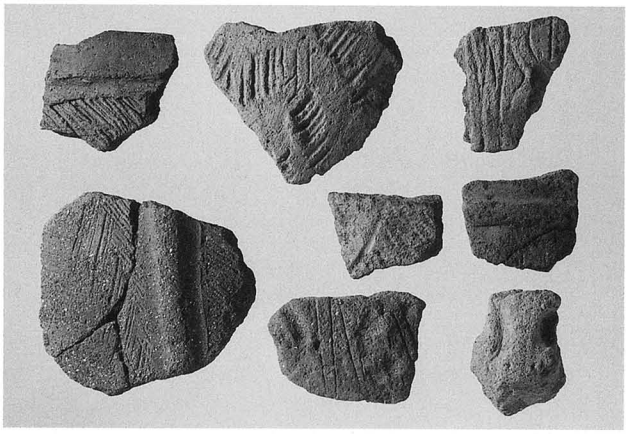
1 号住居出土土器③



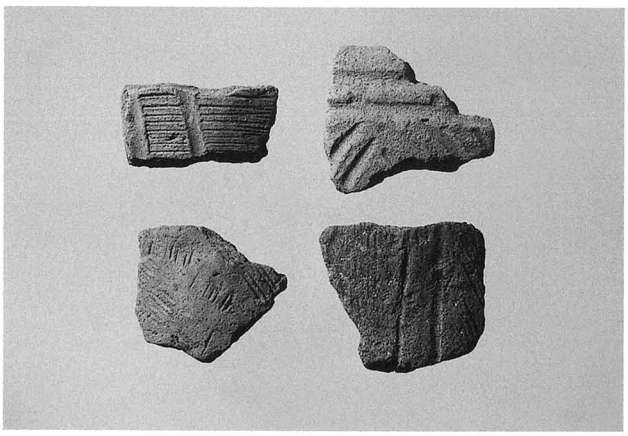
1 号住居出土土器④



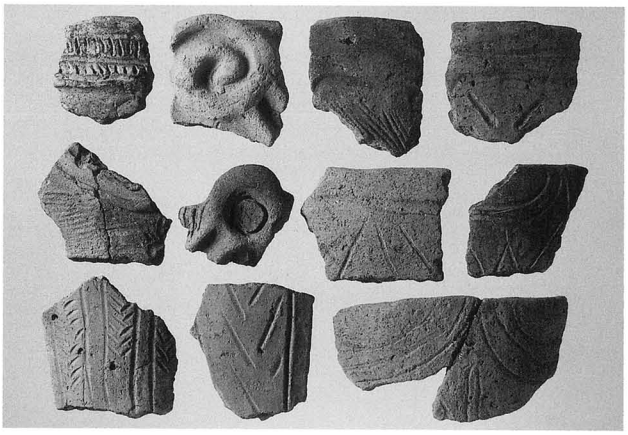
1 号住居出土土器⑤



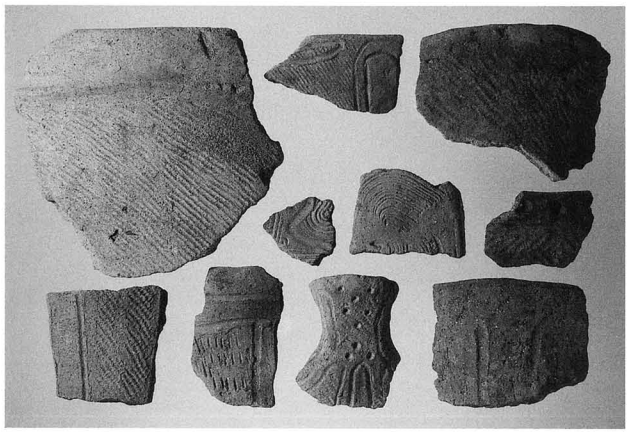
1 号集石出土土器



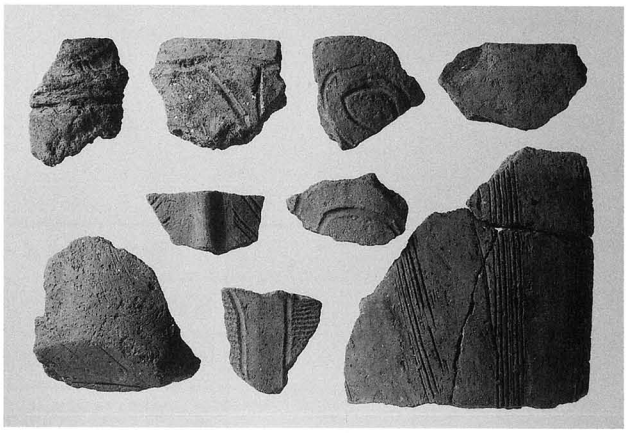
8 号土坑出土土器



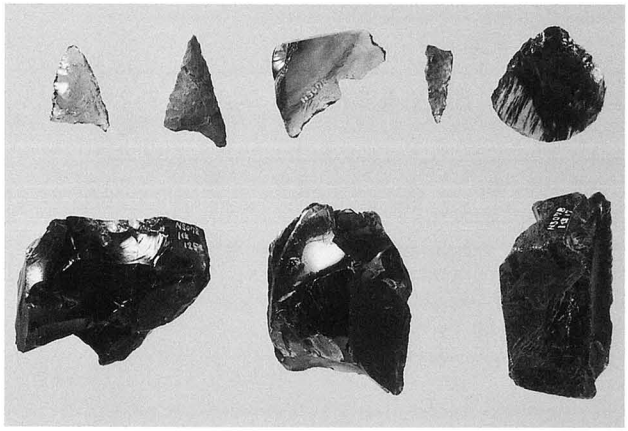
I 区出土土器①



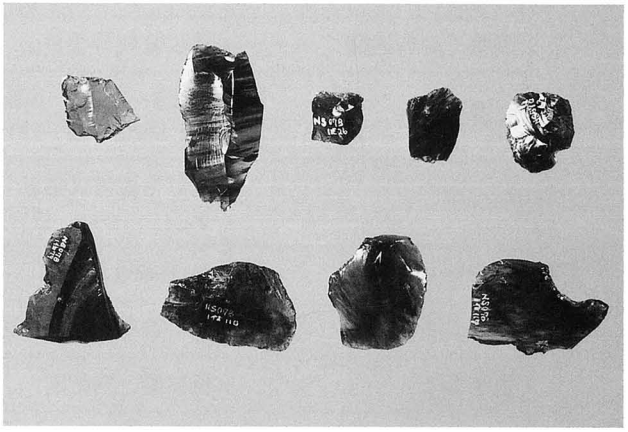
Ⅰ区出土土器②



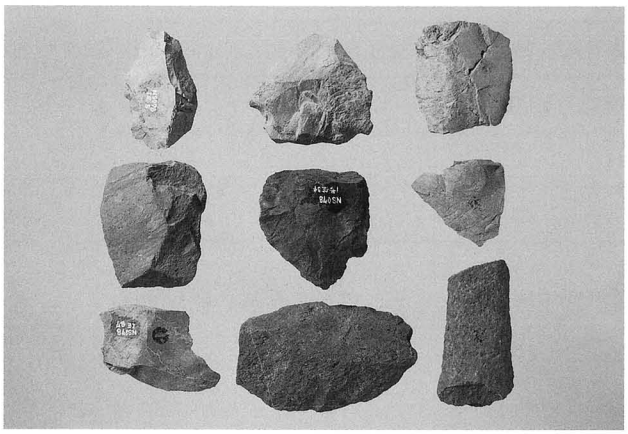
Ⅱ区出土土器



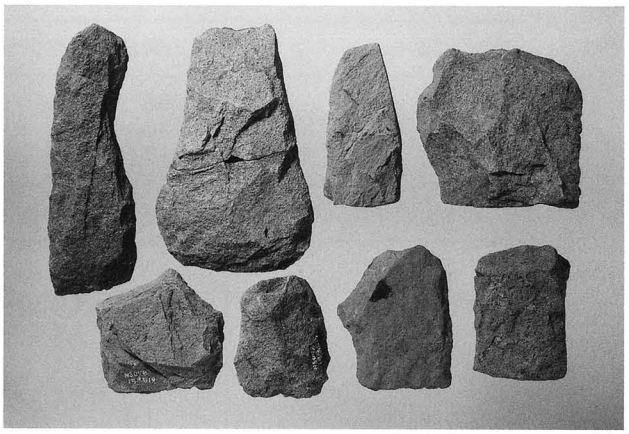
小形石器①



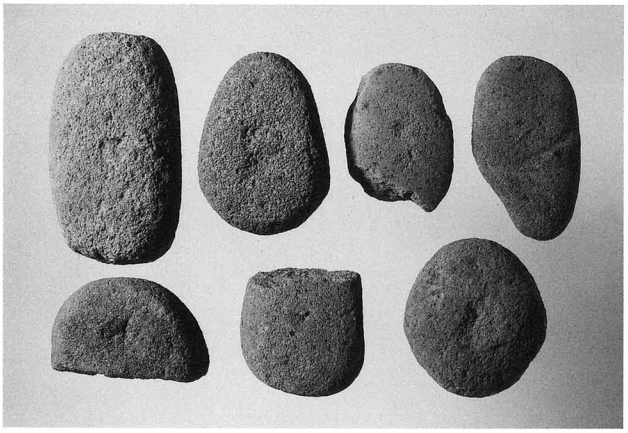
小形石器②



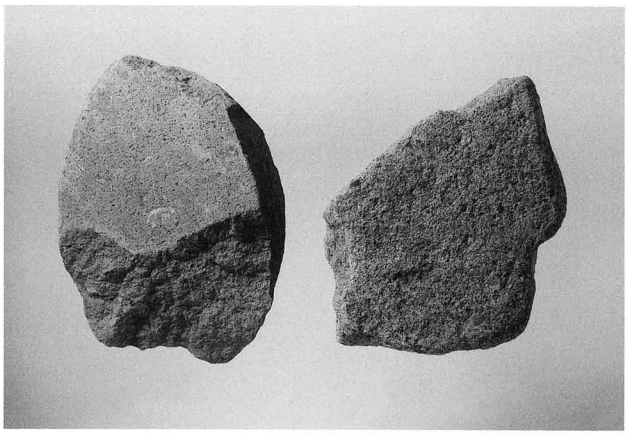
剥片石器他



打製石斧



磨石・敲石



石　皿

報告書抄録

フリガナ	ヒガシカブラ４イセキ
書名	東蕪４遺跡
副題	中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
著者名	小宮山隆、池谷勝典（株式会社アルカ）
編集・発行機関	長坂町教育委員会
住所・電話	〒408－0021　山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575－19 TEL　0551－32－2111
印刷所	鬼灯書籍株式会社 〒381－0012　長野県長野市柳原2133－５
発行日	2002年３月31日
遺跡所在地	山梨県北巨摩郡長坂町中丸字東蕪
遺跡番号	長坂町　No078
１/25,000地図名 位置・標高	長坂上条　北緯　35° 49′ 56″　東経　138° 20′ 10″ 標高　Ⅰ区：793m、Ⅱ区：780m
調査原因	中山間地域総合整備事業（八ヶ岳西部２期地区）
調査期間	2000年８月22日～2000年12月13日
調査面積	175m^2
主な時代	縄文時代
主な遺構	Ⅰ区 縄文時代（中期の竪穴住居跡１軒、土坑８基、ピット５基、集石遺構１基）
主な遺物	Ⅰ区　縄文時代（土器、石器） 中世（古銭） Ⅱ区　縄文時代（土器、石器）

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集

東蕪4遺跡

2002年3月25日　印刷
2002年3月31日　発行

編集・発行　長坂町教育委員会
〒408－0021　山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575－19
TEL　0551－32－2111
印　　刷　鬼灯書籍株式会社
〒381－0012　長野県長野市柳原2133－5
TEL　026－244－0235（代）